浦添市文化財調査報告書第３集

# 親　富　祖　遺　跡

## ― 市道18・24号線改良工事に伴う緊急発掘調査報告書 ―

１９８３年3月

沖縄県浦添市教育委員会

# 序

浦添市教育委員会では昭和56年度・昭和57年度の二ケ年度にわたって、市道18・24号線道路改良事業に伴う親富祖遺跡の緊急発掘調査を実施しました。

調査にあたっては、県教育庁文化課の金武正紀、当真嗣一主任専門員、岸本義彦、大城　慧専門員をはじめ、仲西中学校、地元住民の協力を得て行なわれました。

さらに報告書の作成にあたっては、県立博物館学芸員の大城逸朗氏に石器の石質鑑定を賜わりました。心から感謝申しあげます。

本報告書が私たちの先祖の生活文化や歴史を知るための資料として広く利用されるとともに、今後、市民一人一人が埋蔵文化財に対する理解と認識を深めていただきたいと思います。

最後に、発掘調査および報告書の作成にあたり、いろいろご指導を賜わりました県教育庁文化課をはじめ、地元各位、関係者の方々に対して厚くお礼申しあげます。

昭和58年３月

浦添市教育委員会
教育長　西　原　正　次

# 例　　言

1. 本報告書は、昭和56・57年度に実施した親富祖遺跡緊急発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本遺跡の発掘調査は市土木課の依頼を受け浦添市教育委員会が調査主体になり、県教育庁文化課埋蔵文化財の専門員が担当して行った。
3. 本遺跡から出土した遺物のうち石質の同定を大城逸朗氏（県立博物館学芸員）にお願いした。記して感謝申し上げます。
4. 本書の編集は、前津政廣（浦添市教育委員会文化課文化財担当）・下地安広（同市教育委員会文化課臨時職員）が行った。
5. 本書の執筆は浦添市教育委員会文化課臨時職員の下地安広（沖縄考古学会会員）が行った。
6. 本書の編集・執筆にあたっては県教育庁文化課主任専門員の当真嗣一氏と県教育庁文化課専門員の岸本義彦氏のご指導を賜わった。記して感謝申し上げます。
7. 本遺跡出土の遺物は、浦添市教育委員会において保管中である。

# 目　　次


第Ⅰ章　調査の経緯……1

第1節　調査の経緯……1

第2節　調査体制……1

第3節　整理体制……2

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……2

第Ⅲ章　調査の概要……5

第Ⅳ章　調査の成果……5

第1節　層　　序……6

第2節　出土遺物……6

1.　古　　銭……9

2.　玉……10

3.　貝 製 品……10

4.　土 製 品……10

5.　瓦質製品……10

6.　石　　器……13

7.　土　　器……17

8.　須 恵 器……19

9.　青　　磁……20

10.　白　　磁……39

11.　黒釉・褐釉陶器……43

12.　青　　花（染付）……45

第Ⅴ章　結　　語……47

# 第Ⅰ章　調査の経緯

## 第1節　調査の経緯

親富祖遺跡は1954年に多和田真淳氏によって発見され、氏の報告によれば、すでに壊滅した遺跡と考えられた（註1）。しかし、その後の掘削で僅かではあるが遺物が表採できることが明らかになり、県が報告した遺跡分布調査（註2）や当市作成の遺跡分布調査報告書（註3）に周知の遺跡として登録されることになった。

1980年12月に当市土木課が、当該地内の現道（市道18号線）改良工事を計画することになり、埋蔵文化財の有無及び範囲について照会を受けた。当市教育委員会は親富祖遺跡が所在する旨の回答をして設計変更といった方法で遺跡を保存できないか数回にわたって要請した。しかし、当市土木課は①付近一帯は住宅密集区・学校区なので、設計変更は不可能である。②現道は児童生徒の通学路及び付近住民の生活道路なので、安全確保の面から歩道を取り込んだ道路に改良が必要である。③現道には排水の設備がないため雨降りに住民や児童生徒に支障を来しているなどの理由から現道の改良工事が必要であるとの旨回答であった。

1981年6月22日に再度協議して発掘調査は原因者負担で実施し、記録保存を行なうので一様の同意を得たため、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、調査は土木課より依頼を受けた当市教育委員会が主体になって実施することになった。

当市教育委員会には、埋蔵文化財の専門員が配置されていないので県教育庁文化課に専門員の派遣を依頼したものの目処がたたず、当初計画した日程から大幅にずれて2月4日より調査実施となった。

註

1. 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『沖縄文化財調査報告』　1956年
2. 沖縄県教育委員会「沖縄県の遺跡分布」　1977年
3. 浦添市教育委員会「うらそえの文化財―遺跡分布調査報告―」浦添市文化財調査報告書第1集　1980年3月

## 第2節　調査体制

| | |
|---|---|
| 調査主体 | 浦添市教育委員会 |
| 調査責任者 | 西原正次（浦添市教育委員会教育長） |
| 調査員 | 金武正紀（沖縄県教育庁文化課主任専門員） |
| 〃 | 当真嗣一（同上） |
| 〃 | 岸本義彦（沖縄県教育庁文化課専門員） |
| 〃 | 大城慧（同上） |
| 調査補助員 | 前津政廣（浦添市教育委員会文化課文化財担当） |

調査補助員　下　地　安　広（浦添市教育委員会文化課臨時職員）
調査参加者　喜名浩子、内間　文、宮城シズ、平安山シズ、東江フキ、新城シズ、翁長シズエ、宮城幸栄、宮里正三郎、宮里　亀（以上浦添市民）
調査協力者　大田広好（沖縄国際大学考古学研究室 O・B）、下地　傑、玉城安明、宮城安則、金城寿久、安里和美（以上沖縄国際大学考古学研究室学生）、宮里良一、銘苅全考、又吉盛清、新垣安子、小浜恵子、岸本　明、金城豊二、田里　修、棚原盛次、長間安彦、名護朝彦、当間秀雄、与那嶺真栄（以上浦添市教育委員会文化課職員）

## 第3節　整　理　体　制

遺物洗い・注記　比嘉正子、花城照子（以上浦添市民）
トレース　大城明子（沖縄国際大学考古学研究室 O・B）

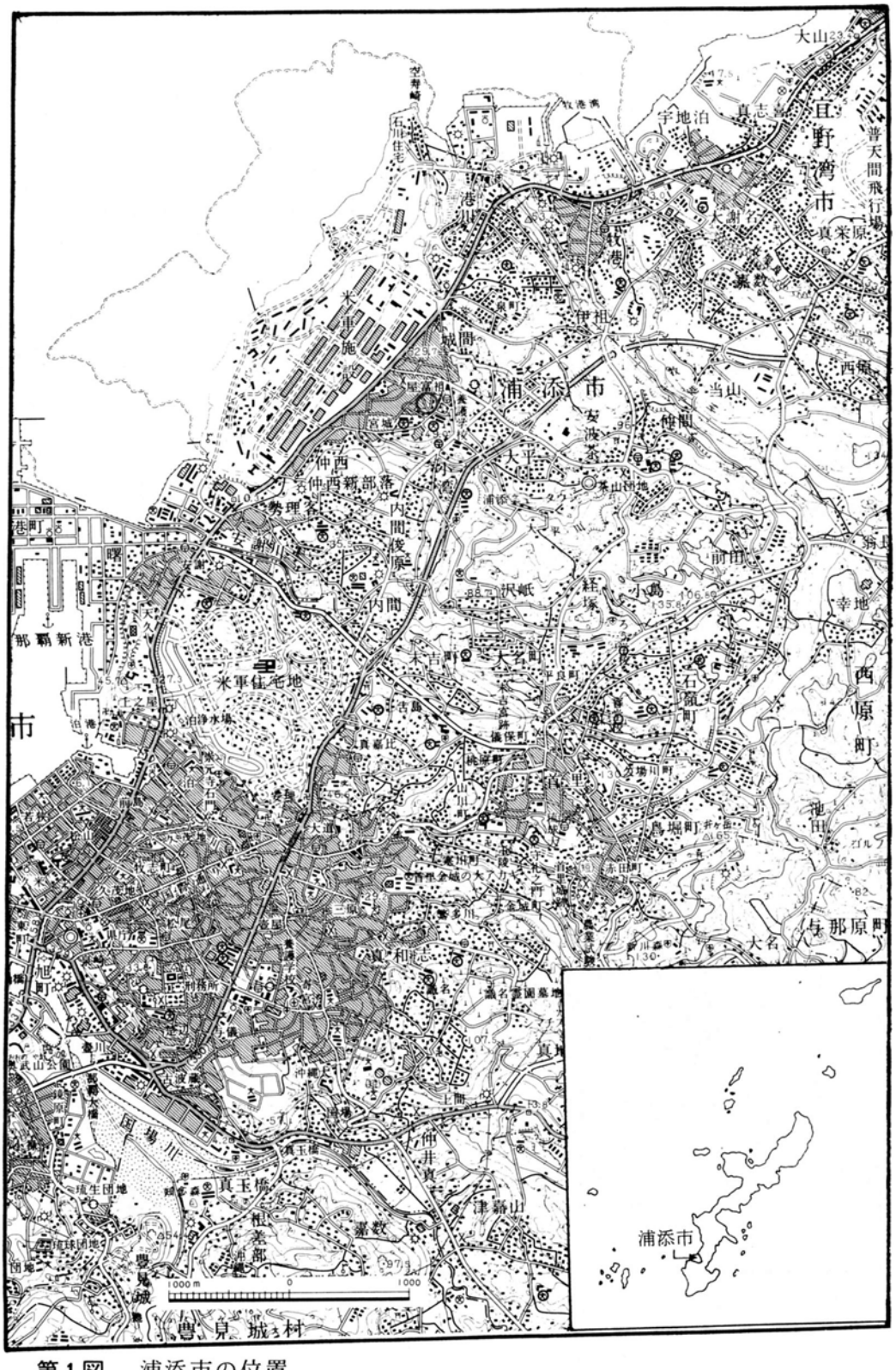
# 第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

本遺跡は沖縄本島南部の県庁所在地である那覇市に隣接する浦添市字屋富祖 164・170・171・174番地にまたがって所在する。

遺跡は海抜45～53*m*の石灰岩台地上に立地するが、一帯の地形は第2図のように住宅及び学校区になっているためだいぶ変貌している。しかし、現地形から推察したとき、仲西中学校を高地に北西の住宅側へ緩やかに傾斜していたと考える。この付近の地質は、第3紀鮮新(せんしん)世から第4紀洪積世にかけて形成された島尻層群と呼ばれる青灰色のシルト質粘土（クチャ）を基盤にし、これを第4紀洪積世中～後期の琉球石灰岩とその風化土（赤土）が不整におおった地質構成から成る。

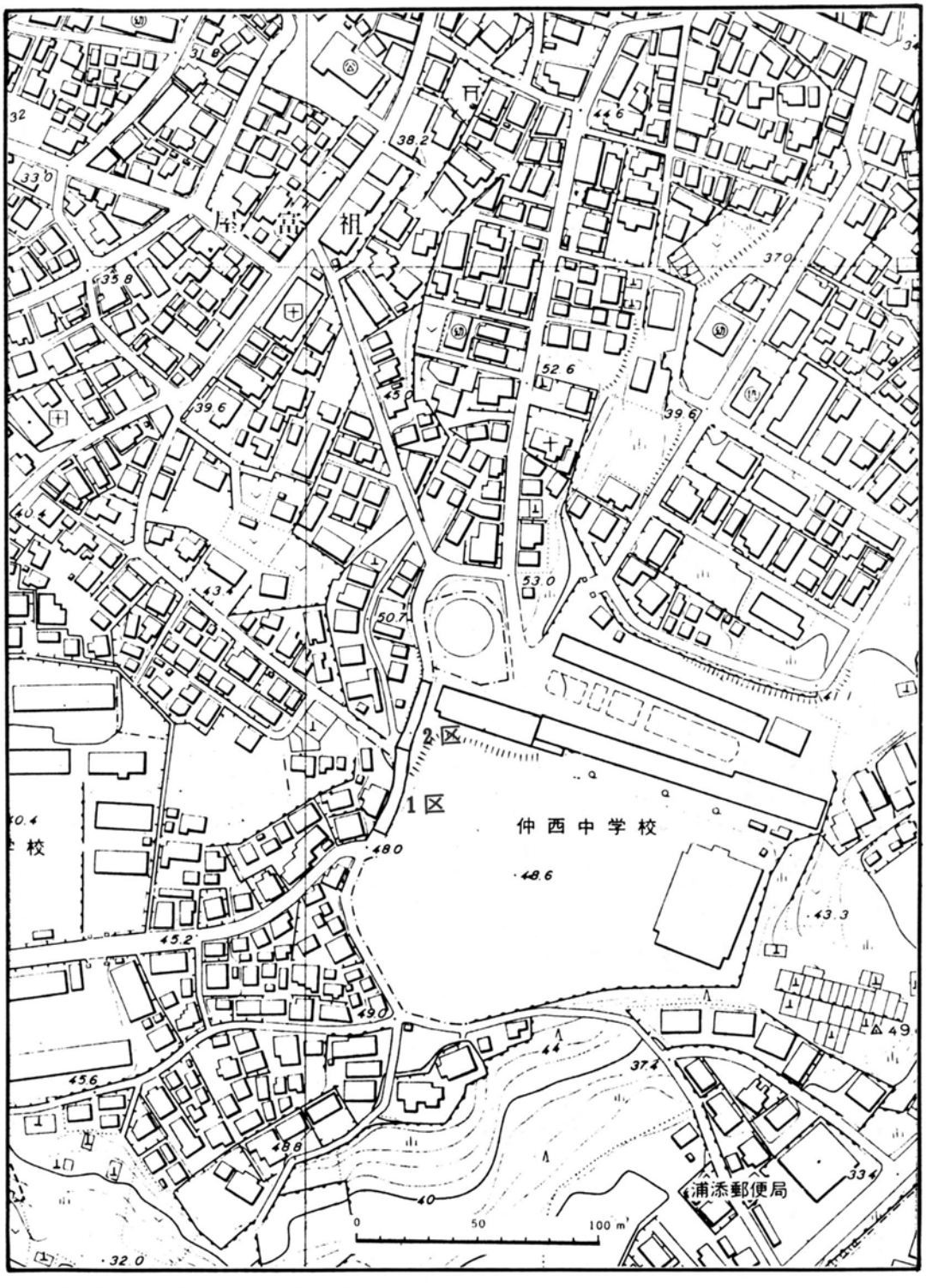
本遺跡は多和田真淳氏が1954年に発見し、親富祖貝塚として紹介した遺跡と一致するが（註1）、当時すでに「・・採石場であったため貝塚は壊滅して僅かに石斧や喜友名貝塚系の土器片と思われるものを採集する事が出来る。」（註2）と記述されていることや前述した現況より全壊に近い状況にあると考えられていたが、その後の掘削で遺物が採集できることが明らかになり包含層が残っている可能性もあるとして周知遺跡の登録がなされていた。又、1980年には本市水道部が配水管敷設工事を実施した際、地表下約1*m*より包含層が確認されたことで遺跡は未だ全壊していないことが明確になった。これまでの表採資料から前Ⅳ期（高宮編年、註3）～グスク時代までの複合遺跡と考えられている。

これまでの聞々取り調査によるとこの付近には殿や根屋があることやエッソのシマと呼ばれていたことなどから親富祖村があったと考えられている。文献には、親富祖村は1731年まで村落として記録に登場するが、1737年に廃村になっている（註4）。



大山
宇地泊
真志喜
宜野湾市
普天間飛行場
大謝名
真栄原
嘉数
港川
牧港
伊祖
米軍施
城間
浦添市
当山
西原
仲間
宮城
大平
仲西
仲西新部落
内間
俊原
勢理客
前田
小島
沢岻
経塚
幸地
那覇新港
米軍住宅地
大名町
石嶺町
西原町
鳥堀町
池田
与那原町
大名
真和志
国場川
真玉橋
仲井真
津嘉山
嘉数
根差部
豊見城
豊見城村
浦添市
1000 m
0
1000


第1図　浦添市の位置




**第2図**　遺跡附近の地形と発掘区

註

1. 浦添市教育委員会「うらそえの文化財―遺跡分布調査報告―」浦添市文化財調査報告書第1集　1980年3月
2. 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『沖縄文化財調査報告』　1956年
3. 高宮廣衛「編年試案の一部修正について」『南島考古　№7』　1981年12月
4. 浦添市史編集委員会「浦添市史―浦添の文献資料第二巻資料編1―」　1981年3月31日

# 第Ⅲ章　調査の概要

発掘調査は発掘区（市道18号線）が生活道路・児童生徒の通学路になっていることから、全面発掘となると付近住民や児童生徒の混乱が想定されたため、発掘を2区に分け、1区を昭和56年2月3日から3月6日まで、2区は同月26日から14日まで実施した。

グリッド設定は本調査の場合、発掘区が現道で地図に市道18号線として記入されていることや試掘調査より大半の壊滅が想定されるなどの理由から、アスファルトや撹乱層（表土）を削り取って含包層を確認した段階で必要に応じてグリッド設定することにした。結果、ほとんど地山まで撹乱で部分的に含包層が認められたため、グリッドおよび層序による発掘は断念し、残っている含包層の発掘調査に終始した。以下、2区の調査を概述する。

1区（市道18号線の南半分）は、北側の西半分で部分的に含包層が確認されたものの、遺物含包量は少なく、資料も小破片であった。西壁に接して平面形楕円（長径約2.6m、短径約1.5m、深さ約38cm）の落ち込みが1基認められたが、判然としなかったため、一様、記録して類例と比較したうえで検討することにした。本区出土の遺物で特筆すべきものに、石鏃（せきぞく）・小玉（こだま）・白磁の玉縁口縁部（たまぶちこうえん）破片などがある。

2区（市道18号線の北半分）では、仲西中学校の図書館西側に平行する箇所で含包層が見られた。しかし、大半が撹乱あるいは二次堆積で岩盤の凹部分にオリジナルな層が僅かに認められた。遺物は1区と比較すると大形の破片で量的にも多く出土した。尚、第12図11のほぼ完形の青磁皿は本区の配水管下方の出土である。

# 第Ⅳ章　調査の成果

今回の調査より市道18号線のほぼ中間付近で含包層が確認されたが、配水管敷設工事や汚水管の敷設、道路工事などで含包層が切り取られていたり、撹乱されたりなどして、けっして良好な含包状態ではなかった。しかし、出土遺物3,087点（表採6点を除く）は大形の資料こそ少ないが、時代の人工遺物・自然遺物として、当時の人々の生活・文化を考える上で貴重なものである。

遺物は、第１表に示した18種が出土したが、その中でも古銭・小玉・青磁・白磁・黒釉陶器・青花は本遺跡の時代・特徴の推察上、貴重な資料である。陶磁器は古いタイプの白磁玉縁口縁部破片・口禿白磁皿・鎬蓮弁文青磁碗（13・14Ｃ）から新しいタイプの丸頭細線蓮弁文青磁碗・青花（15・16Ｃ）まで出土した。

前述した遺物は、時代の異なる遺物（石鏃）が１点出土しているものの、主体はグスク時代の遺物である。

## 第１節　層　　序

第Ⅲ章で記したように、発掘は２区に分けて調査したが、ほとんど地山まで撹乱であった。しかし、部分的に認められた含包層は少なくとも現代の撹乱ではないことから、比較的保存の良い１区の層序を略述する。

**第１層**

赤褐色土と青灰色粘土（クチャ）からなるが、北側で約130㎝と厚く、南側へ次第に厚さを減じ、南端では約20㎝前後のアスファルトとコーラル（土木工事の際、アスファルトの下に敷くもの）になる。又、南端ではコーラルの直下は地山（赤土）になっている。

**第２層**

茶褐色土で手ざわりはサラサラする。全面に見られる層ではなく、後述する第３層の上方に薄く（層厚は厚いところで約20㎝）乗っている。しかし、所々で上層が落ち込み、上層と第３層は直接する。遺物の含包量は最も少ないが、石鏃は本層の出土である。

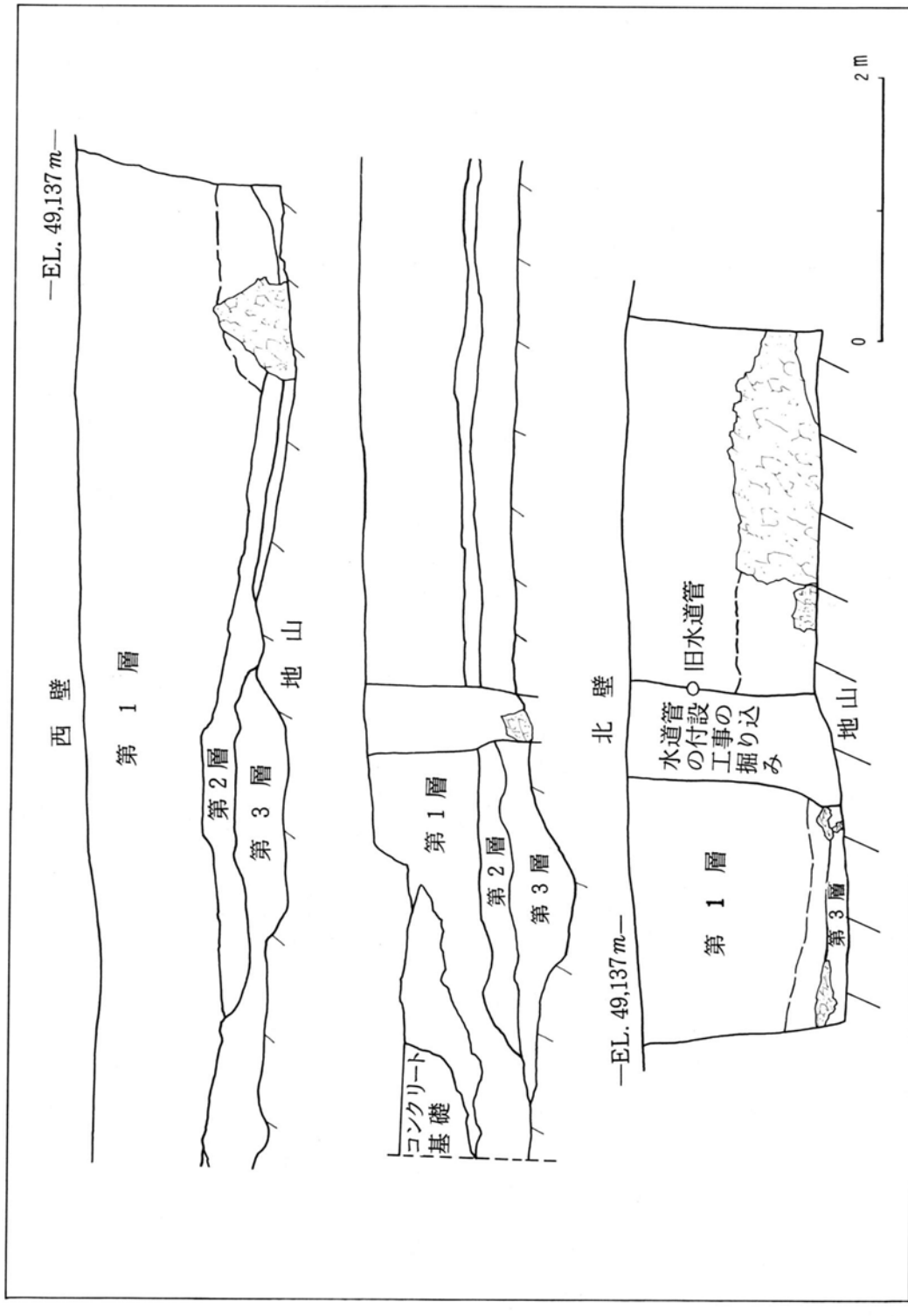
**第３層**

本区では北西側で部分的に認められた。黒褐色土で、厚い箇所では層厚約40㎝を測る。炭や焼土粒が散見されるが、遺物含包量は少ない。特筆する遺物に小玉・白磁玉縁口縁部破片がある。

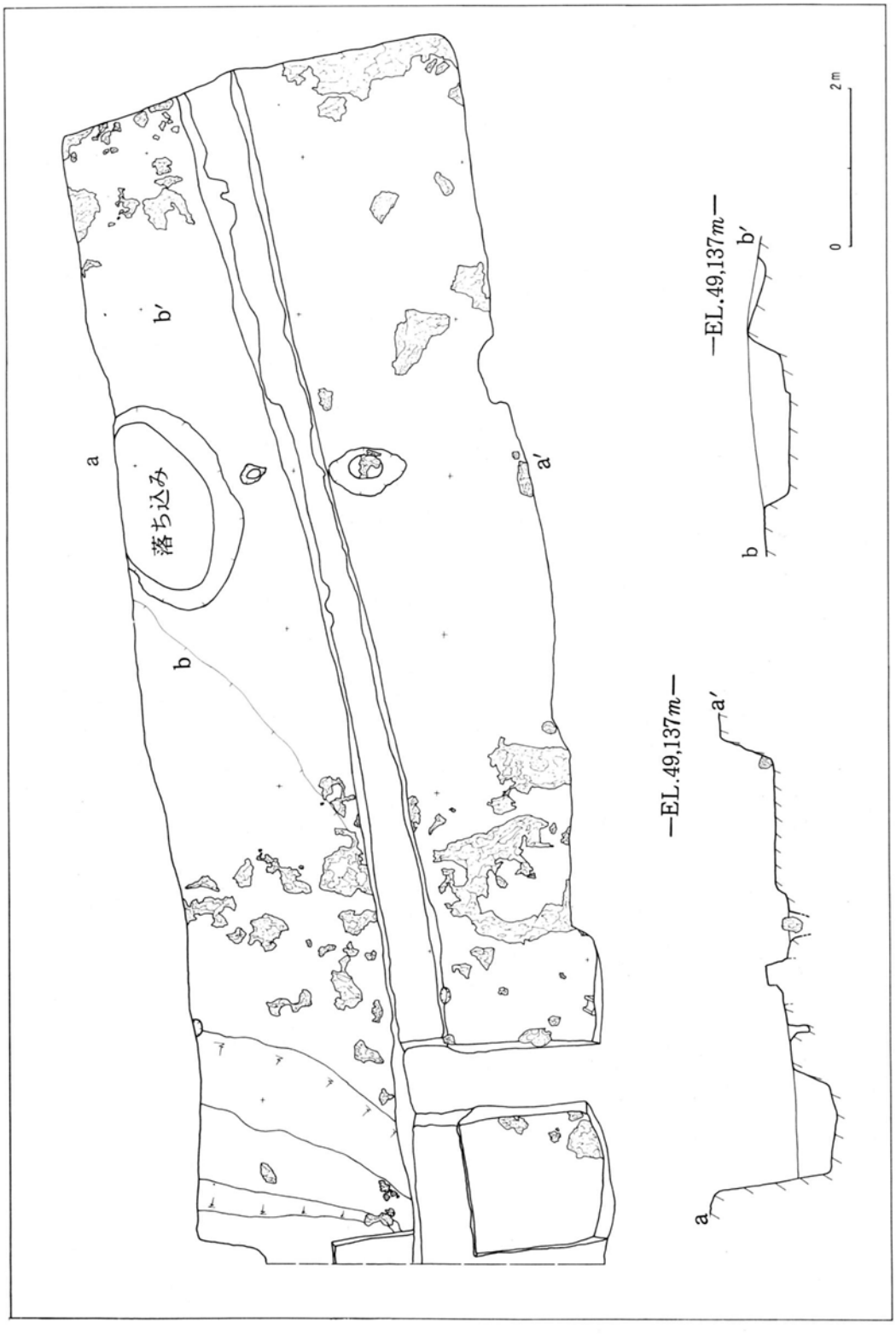
以上、各層を略述したが、文化層は第３層の１枚のみであった。しかし、同層も部分的に認められたため詳細は判然としないが、遺物よりグスク時代の層と見てよいと考える。

## 第２節　出　土　遺　物

本調査の出土遺物は自然遺物と人工遺物に分けられる。前者には貝類や獣魚骨・自然礫などが含まれるものの、未だ専門家の同定を行なってないため、本文では人工遺物についてのみ報告を行なうことにする。尚、出土状況を第１表に示した。


西壁
—EL. 49,137m—
第1層
第2層
第3層
地山
第1層
第2層
第3層
コンクリート基礎
北壁
旧水道管
水道管の付設工事の掘り込み
地山
第1層
第3層
—EL. 49,137m—
0
2m

**第3図**　層　序（1区）




**第4図**　第1発掘区平面図

**第1表　遺物出土状況**

| 遺物 / 層位 | 人工遺物 | | | | | | | | | | | | | | 自然遺物 | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 古銭 | 玉 | 貝製品 | 土製品 | 瓦質製品 | 石製品 | 石器 | 土器 | 須恵器 | 青磁 | 白磁 | 黒釉陶器 | 褐釉陶器 | 青花(染付) | 獣骨 | 魚骨 | 貝類 | 自然礫 | |
| 第1層 | 1 | | 2 | 2 | | 1 | 11 | 1,217 | 25 | 445 | 50 | 13 | 76 | 34 | 90 | 4 | 68 | 9 | 2,048 |
| 2 | | | | | 2 | | | 65 | | 48 | 5 | 3 | 4 | 10 | 14 | | 4 | | 155 |
| 3 0−10 | 4 | 3 | | | | | 2 | 170 | | 32 | 6 | 7 | 8 | 8 | 12 | | 6 | | 258 |
| 10−20 | | | | | | | 1 | 308 | 6 | 161 | 14 | 4 | 14 | 6 | 23 | | 23 | 3 | 563 |
| 20−30 | | | | | | | | 57 | | 9 | 1 | 2 | | | | | | | 69 |
| 計 | 5 | 3 | 2 | 2 | 2 | 1 | 14 | 1,817 | 31 | 695 | 76 | 29 | 102 | 58 | 139 | 4 | 101 | 12 | 3,093 |

注：自然礫は石灰を除く。

## 1. 古　　銭

古銭は破片を含め4種5点が出土した。銭名が判読できるものは、西暦1626〜1869年頃まで長期にわたって鋳造された寛永通寶3点のみで、他の2点はいずれも「元」、「武」の一文字が認められる破片である。

第5図1〜3に図示した3点が前述した寛永通寶である。同図1は最も保存が良く、銭名も鮮明で、同図2・3は前者1に比べると保存は悪いが、銭名は明瞭である。3の「永」の左側には鋳造時の自然孔、あるいは鋳造後の腐食孔・穿孔なのか判然としない横長の孔が認められる。

同図4は「元」の文字が下位に見られる破片である。　同位置に「元」の文字を配する銭は数十種あることから何れの銭になるかは不明である。

同図5も前記4同様の下位破片で、「武」の文字が見られる。「武」が同位置に配される銭には、洪武通寶（初鋳造1368年）・隆武通寶（初鋳造1645年）・昭武通寶（初鋳造1678年）が知られていることより何れかに属するであろう。

**第2表　古銭の法量**

| 特徴 / 挿図番号 | 銭名 | 残存長径(mm) | 外縁厚さ(mm) | 残存重量(g) | 孔径(縦×横)(mm) | 出土層位 | 初鋳造年代 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第5図1 | 寛永通寶 | 24.5 | 1.2 | 3 | 6 ×6.2 | 3 | 1626 | |
| 〃 2 | 〃 | 23.4 | 1.3 | 2.5 | 6 ×6.2 | 3 | 〃 | |
| 〃 3 | 〃 | 22.8 | 1.2 | 1.8 | 6.5×6.2 | 1 | 〃 | |
| 〃 4 | □元□□<br>□□元□ | − | 1.3 | 1 | − | 3 | − | 破片 |
| 〃 5 | □武□□ | − | 1.7 | 0.8 | − | 3 | − | 破片 |

## 2. 玉

第５図６～８に図示した３点がこれに属するもので、いずれも欠損品である。

同図６・７の資料は穿孔された部分より右半分を欠損するが、正面観は楕円、上面観は円の形が推察される。６は孔径約２㎜、現存幅約９㎜、高さ約８㎜、重さ0.5ｇを測る。７は孔径約2.3㎜、現存幅約7.5㎜、高さ約６㎜、重さ0.2ｇを測る。

同図８は前者２点に比べると幾分小さくなると思われるもので下半分を欠失する。孔径は約1.2㎜で現存幅は約４㎜、高さ約1.5㎜、重さ0.1ｇの法量を測る。以上、前述の２点を含めた３点はガラス質で、薄い青色を呈する。

近年、この種の玉はグスク時代の遺跡より数多くの出土が報じられている。

## 3. 貝 製 品

貝製品は同種２点が得られたが、うち１点を第５図９に示した。

同図９はタカラガイ科の背面を除去したもので、他に加工痕は認められない。本標品は長さ約３㎝、幅約2.3㎝、高さ約１㎝、重さ５ｇの法量を測る。この種の製品は民俗事例から網の錘としての利用が考えられている（註１）。第１層の出土である。

## 4. 土 製 品

第５図10・11の２点がこれに属するものである。同図10は上下両端と側面の一部を欠損するが、現形より円柱状の形が想定される。しかし、未だ完成品ではないので製品の種類・用途は不明である。胎土には石英と赤色粒を混入し、焼成は普通で、色調は赤褐色を呈する。法量は径約1.7㎝、長さ約2.3㎝、重さ約６ｇを測る。第１層より出土。

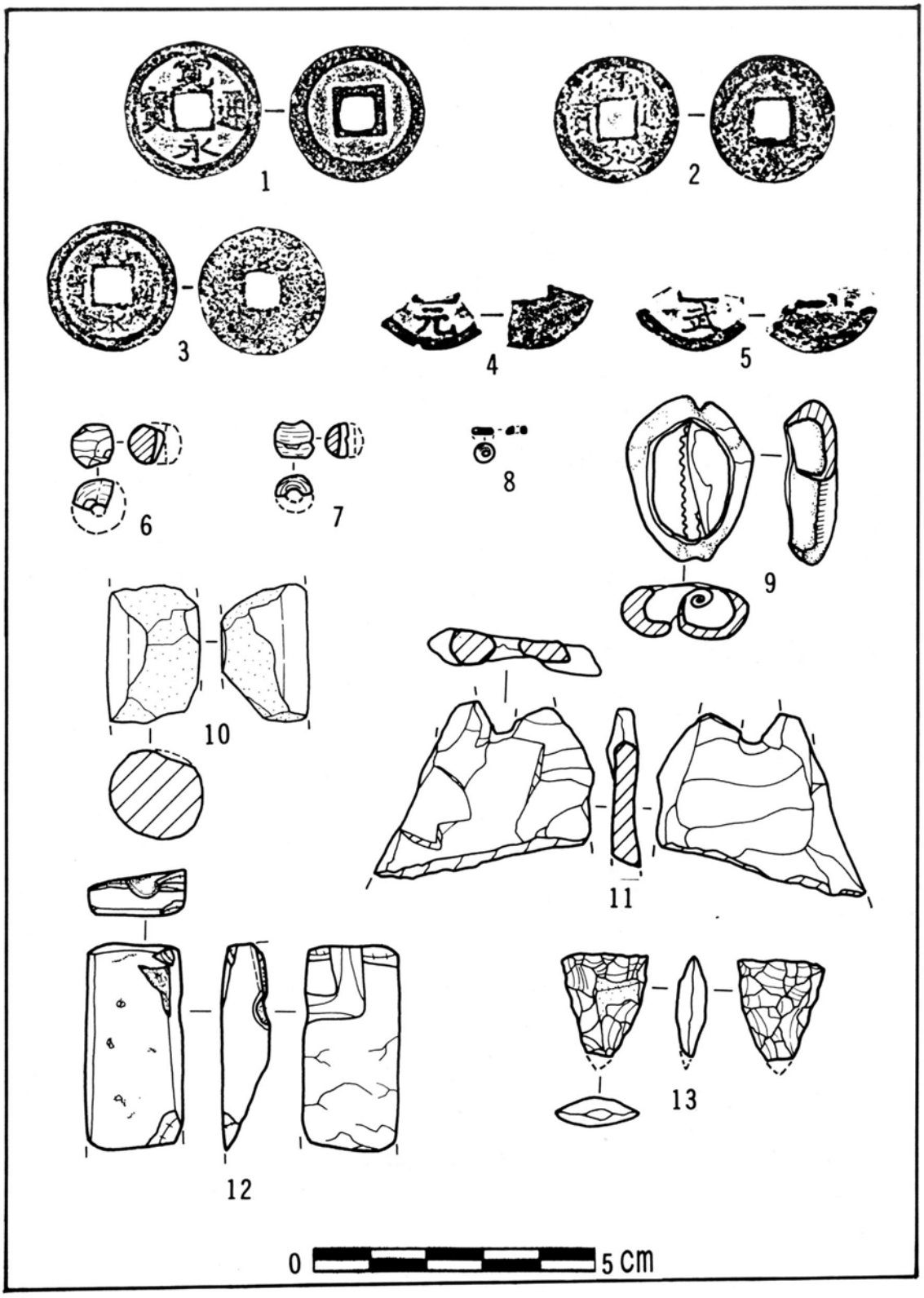
同図11は滑石を多量に混入するもので、一見、滑石の製品に見違える。現形は携帯用靴ベラの柄の部分に類似する破片で、表裏面は鋭い刃物様のもので削って整形するが、表裏とも雑で凹凸面を作っている。標品の上位には抉（えぐ）りも認められる。第１層の出土である。

## 5. 瓦質製品

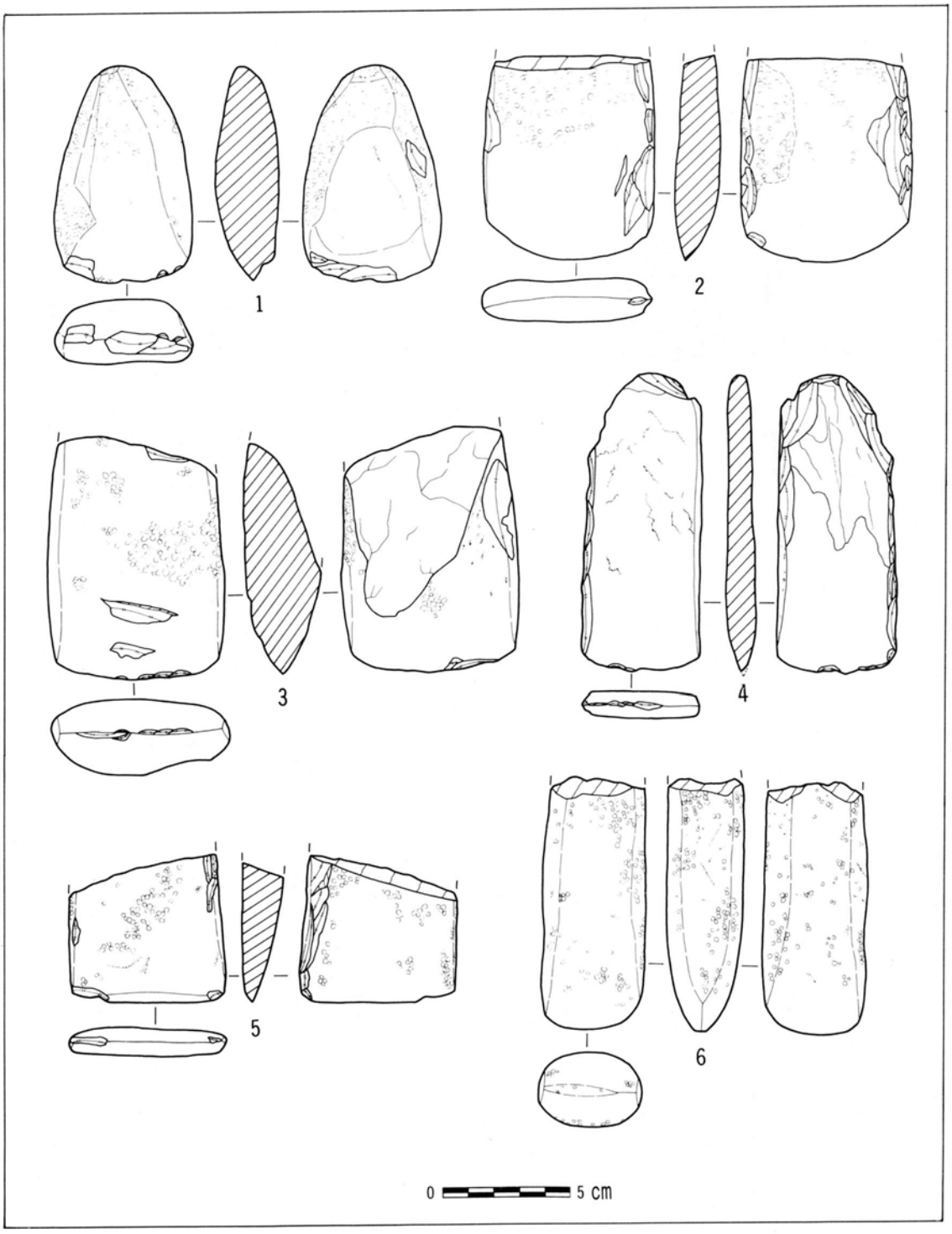
瓦質製品としたものは瓦になると思われるが、破片のため判然としないものである。一様、瓦質の製品であることに違いはないので前記の仮称を使うことにした。第７図３・４に図示した２点がそれで、両者とも還元焔により焼成され、色調は灰色を呈する。以下、２点を略述する。

同図３は厚さ約１～1.3㎝を測る板状のもので、外面に格子目状の叩き、内面には縄目が認められる。胎土は後者４に比較するとやや砂質で、焼成も良好である。

同図４も扁平な資料で、厚味は約1.5～２㎝を測る。本標品も外面に縦位の細い縄目、裏面には判然としないが削りおよび撫で様の調整が認められる。胎土は泥質で、焼成は普通である。仮りに瓦になるなら、一部に立ち上がりが残っていることよりＳ字瓦が想定される。２点とも第２層の出土である。




**第5図**　古銭・玉・貝製品・土製品・石製品・石鏃




**第6図**　石　　器

## 6. 石　　器

今回の調査で得られた石器は総数７点で、石鏃と石製品の２点を除くと特筆するものが少ないことから、未だ詳細な報告がされていない本遺跡採集の石器６点（石斧）を含めて概述することにした。尚、前述の表面採集は昭和24～34年の10年間にわたり、仲西中学校運動場拡張工事や図書館建設の際に西原栄正氏（現、浦添市文化財保護審議委員長）や児童生徒によって行なわれたものである。

石器は前述した表採品を含めると総数14点で、石鏃（１点）、石斧（６点）、石製品（１点）、器種不明（５点）の４種に大別できる。以下、種別に略述する。尚、図示した石器の石質・法量等は第３表に示した。

**第３表　石器の法量**

| 挿図番号 | 品　種 | 法　量 | | | | 石　質 | 出土層位 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ（㎝） | 幅（㎝） | 厚さ（㎝） | 重さ（g） | | | |
| 第５図12 | 石製品 | 3.7 | 1.7 | 0.8 | 7.5 | 砂　岩 | 1 | 片面を欠く |
| 〃　13 | 石　鏃 | 1.7 | 1.5 | 0.8 | 1.3 | チャート | 2 | 先端を欠く |
| 第６図１ | 石　斧 | 8.4 | 5.4 | 2.5 | 195 | 斑レイ岩 | 表　採 | ほぼ完形 |
| 〃　２ | 〃 | 8.1 | 6.6 | 1.8 | 172 | 輝緑岩 | 〃 | 刃部破片 |
| 〃　３ | 〃 | 9.5 | 6.8 | 3.1 | 322 | 砂　岩 | 〃 | 〃 |
| 〃　４ | 〃 | 10.7 | 4.6 | 1.2 | 129 | 緑色片岩 | 〃 | ほぼ完形 |
| 〃　５ | 〃 | 5.8 | 6.1 | 1.6 | 92 | 斑レイ岩 | 〃 | 刃部破片 |
| 〃　６ | 〃 | 9.9 | 4.0 | 3.2 | 261 | 砂　岩 | 〃 | 頭部欠損 |
| 第７図１ | その他 | 7.5 | 4.4 | 3.9 | 182 | 砂　岩 | 3 | 半欠品 |
| 〃　２ | 〃 | 4.9 | 5.7 | 1.9 | 91 | 輝緑岩 | 1 | 二次使用？ |

注：法量は最大値を示す。

### a．石　　鏃

第５図13に示す１点で、先端を欠くもののほぼ完形のチャート製の打製石鏃である。平面形は右側辺でやや弧を描くが、全体に整然とした三角形を呈する。縦断面・横断面はレンズ状を呈する。しかし、縦断面では厚肉の部分が底辺側にずれている。石鏃は長さ２～３センチが一般的なサイズといわれている（註２）が、本標品も先端を復元したとき約２㎝を測るので、一般的サイズと見てよいであろう。

### b．石　　斧

石斧は第６図１～６に示した６点で、うち２点は完形品、残りの４点は身の半分を欠く破損品である。これを製法でみると局部磨製と磨製の２種に大別できるが、形態や諸特徴からするとさらに個々

の性格を異にする。以下、図の順に略述する。

第６図１は局部磨製石斧で刃部の大半を欠くが、ほぼ完形の資料で平面バチ形を呈する。研磨は刃部にのみ加えるものの、裏面では一部自然面と併用され、一見研磨面が広いような錯覚を与える。しかし、基部および側面は敲打（たうだ）成形である。刃部は前述したように大半を欠くが、両刃で弱い弧を描く円刃が想定される。断面は横断面で隅丸の台形、縦断面では平隋円を呈する。ただし、横断面は基端に移行するにつれ楕円になる。本標品は一見沖縄新石器時代前Ⅳ期に伴出する石斧に見えるが、側面に調整打剥が観察できない点や成形が敲打と研磨に終始している点などから、前述の前Ⅳ期に出土する石斧と性格を異にしていると考える。

同図２・３は身の半分を欠損する刃部破片で、平面短冊形が想定されるものである。２は前記１同様、局部磨製石斧に属する資料で、刃部は表面が直線的に刃縁へのび、背面は円味をもって刃縁へ移行するいわゆる片刃的両刃である。側面は打剥調整により成形しているが、磨滅して角はない。全体に偏平である。本標品は硬質の石材ではないにも係わらず刃が良く残っていることから、力量の少ないものに使用されたと推察する。刃に擦痕用の使用痕は認められない。３は磨製石斧に属するもので、全体に研磨は丁寧であるが、随所に自然面や調整剥離痕を残している。刃部は表裏より磨いた両刃で、刃縁はほぼ水平である。刃には使用による小さな剥離があり、本来の鋭さは残ってない。この種の石斧は、沖縄新石器時代前Ⅴ期の遺跡より多くの出土が報告されている。

同図４も磨製に属するもので、表裏面に研磨を施している。研磨は刃部で入念であるが、基部へ移行するにつれ雑になり、裏面では身の半分より自然面になっている。側面は左側でほぼ一方向からの打剥成形で、右側は自然面である。刃は大半を欠くが、残存部より刃縁の水平な両刃の円刃が想定される。尚、本標品は全体に肉薄で扁平である。

同図５も前者４同様、磨製に属すると思われる刃部の破片である。両面とも丁寧な研磨で、裏面では光沢を呈する。しかし、側面は打剥と敲打調整に終始している。刃は片面より入念に磨いた片刃で、刃縁は水平である。本標品は使用を考えた場合、刃の状況から手斧が想定されるが判然としない。

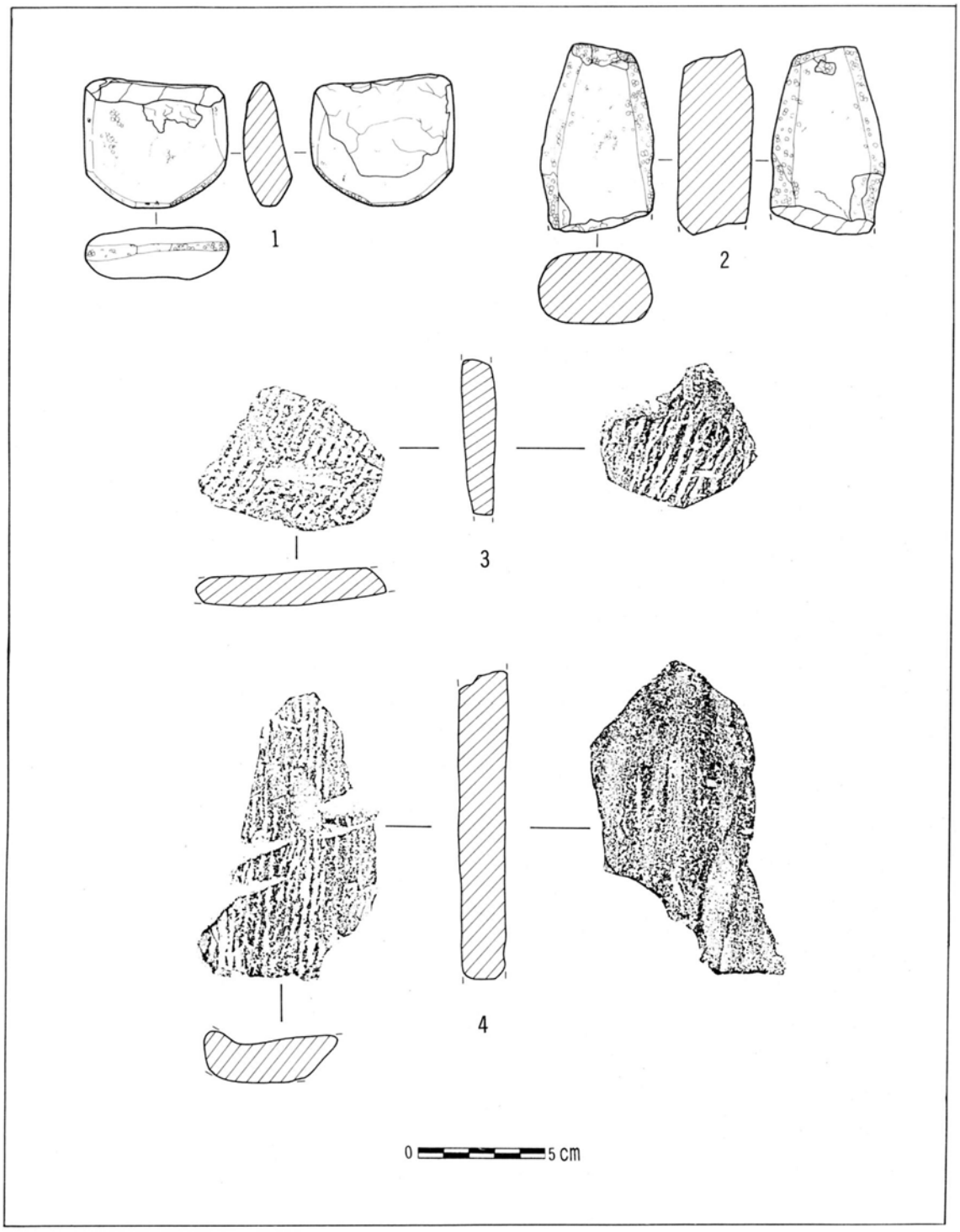
同図６は基部の頭部を欠損するもので、現形は平面ほぼ長方形、横断面は隅丸の方形を呈する。本標品も磨製で、敲打調整のあとに研磨を施しているが、全体に雑で随所に敲打痕を残している。刃は両刃で、弱い偏刃を呈するが、刃は潰れ鋭さはない。

### ｃ．その他の石器

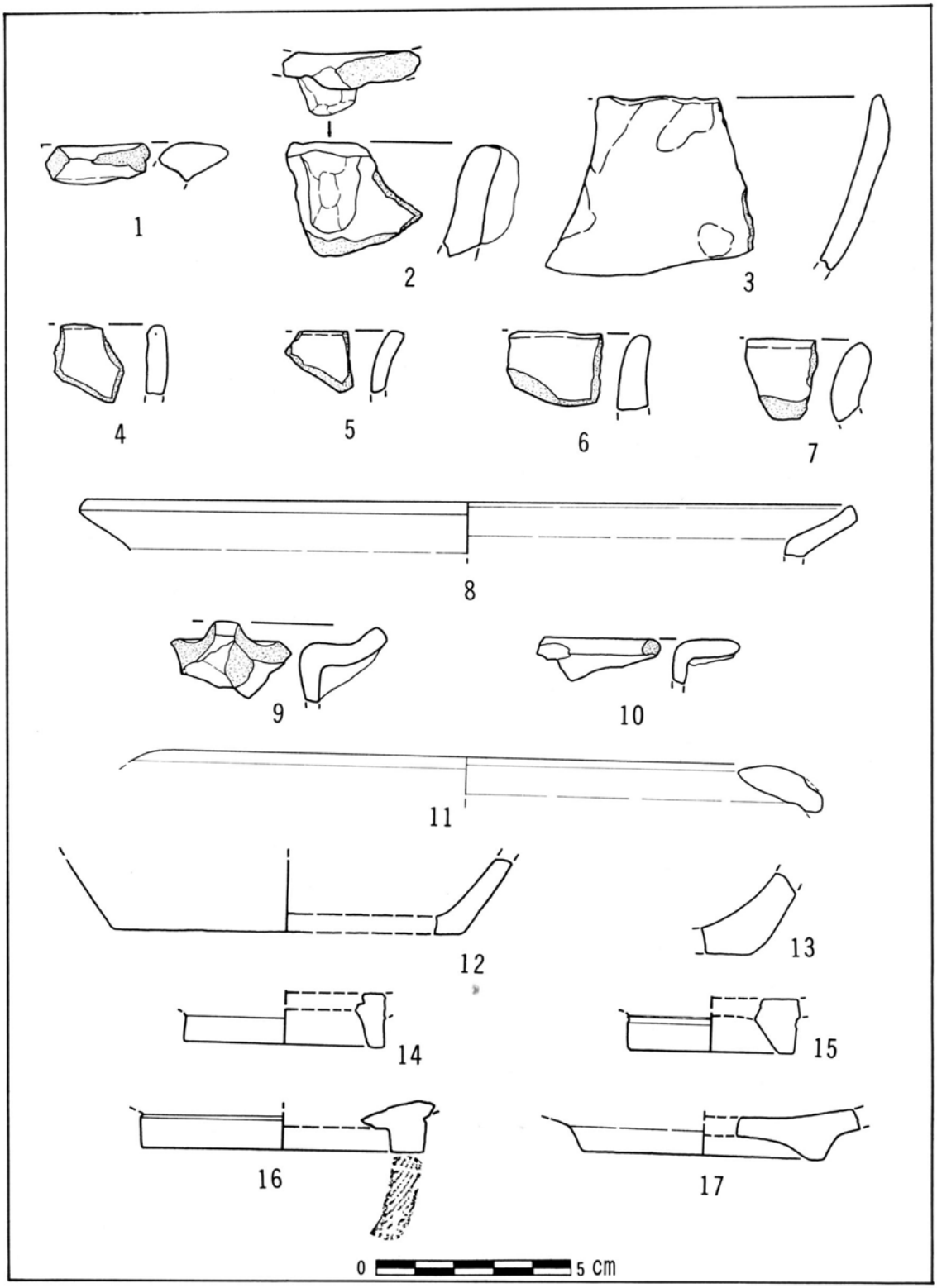
前述した石鏃・石斧のほかに、研磨を有するけれども破損が著しいために原形や用途を推察し得ないものが７点ある。これについては、特徴的なもの２点と中でも大形の破片２点（第７図１・２）を代表させ、残りの４点は保留した。以下、図示した３点を概述する。

第５図12は下端と背面を欠くが、ほぼ長方形に近い形状が推察できるものである。面を保持している箇所（表面、左右の側面、上位側面）は丁寧な研磨で、上と右の２側面より孔を穿っている。２孔は延長部で貫通し、背面より見ると逆「L」字状を呈する。孔径は入口で約６㎜を測るが、中では約４㎜前後になっている。

第７図１は石斧の基部を想定させるが、それ以上の域をでないものである。側面は敲打、表裏面は砥磨（ていま）成形である。




**第7図**　石器・瓦質製品




**第8図**　土　　器

同図2も一見石斧の刃部破片に見えるもので、刃に相当する部分は潰れ平坦になっている。本標品は上位破損部の角を丸くしていることより、再生の完形品の可能性も考えられる。そうなると用途が問題になるが、石斧を転用したものに革なめしという石器がある。あるいは、本標品も手中に握り革なめし石器と同種の利用法をしたものであろうか。しかし、現段階は推測の域を脱してないため、用途考察の一例とする。

## 7. 土　　器

今回の調査で出土したものの中では最も多く1,817点を採集した。土器片はほとんどが小破片で、完全に復元しうるものはない。したがって、器種・器形を主にした記述ができないため胎土・焼成・成形手法等の諸特徴で概ね3類に大別して略述することにした。

Ⅰ類　胎土は泥質で器面にポーラスが見られるものである。一般にグスク系土器と呼ばれている。

Ⅱ類　胎土・焼成・器色の諸特徴等は沖縄新石器時代後Ⅳ期終末の土器（フェンサ下層式）に近似する。まれに、滑石を胎土に混じえるものもある。

Ⅲ類　胎土は洗練され細かく、ロクロ成形で器壁は薄い。一般に陶質土器と云われているもので、前記Ⅰ・Ⅱ類の土器とは胎土・成形手法・焼成等、すべてにおいて大差が見受けられる。

以下、分類別に略述する。一様、第4表に分類別の出土状況を示した。

**第4表　土器出土状況**

| 類 / 部位 / 層位 | Ⅰ | | Ⅱ | | | Ⅲ | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 口縁 | 胴 | 口縁 | 胴 | 底 | 口縁 | 胴 | 底 | その他 | |
| 第1層 | 1 | 446 | 3 | 599 | 3 | 11 | 149 | 2 | 3 | 1,217 |
| 2 | | 22 | 1 | 38 | | | 2 | | 2 | 65 |
| 3 0-10 | | 73 | | 87 | | | 9 | 1 | | 170 |
| 10-20 | | 149 | 2 | 156 | | | 1 | | | 308 |
| 20-30 | | 31 | | 26 | | | | | | 57 |
| 計 | 1 | 721 | 6 | 906 | 3 | 11 | 161 | 3 | 5 | 1,817 |

### Ⅰ　類

これに属するものは722点出土したが、第8図1の口縁部小破片1点以外は無文胴部である。

同図1は口縁部が折り曲がったように外反するもので、口唇は舌状を呈する。器面調整は内面に横位擦痕が認められるが、外面は磨耗して判然としない。器色は外面で暗褐色、内面では赤褐色を呈する。本標品のような小破片より器形を推察することは不可能であるが、敢えて類似する資料を捜すな

らグスク系土器によくみられる鉢形かと考える。第１層の出土である。

### Ⅱ　類

これに属するものは３者に大別した中で最も多く915点出土した。しかし、うち904点が無文の胴部破片で、口縁部は６点、底部も３点を数えるのみである。

第８図２～７に示した６点は口縁部の小破片である。同図２は口縁に方形状の瘤を貼付けたもので、口唇はほぼ平坦に成形する。胎土には石英を主に混入し、焼成は良い。器色は赤褐色を呈する。この種の土器は熱田貝塚で、滑石製石鍋を模写したと考えられている（註３）。第３層10～20㎝の出土。

同図３は弱く彎曲して外側へ開くもので、口縁は小さく波状を呈する。胎土は細かく、石英と赤色粒を混入する。焼成は良好で、器色は外面赤褐色、内面では橙褐色を呈する。器面の調整は両面ともナデ調整であるが、外面はやや雑で粘土粒の付着が見られる。第３層10～20㎝より出土。

同図４～７の４点はいずれもさらに小さい破片で、４は口縁が僅かに内彎し、５・６・７の３点は外反する。口唇は５のみやや平坦に成形するが、他は円味を呈する。器壁は４・５の２点が薄く、６・７は一般的である。器面調整は７の１点のみ、内面に篦削(へらけず)りが認められるが、他の資料は判然としない。焼成も７は良好で、他は普通である。器色は４・５・７が赤褐色、６は灰色を呈する。しかし、前記６は内外面に赤褐色面が僅かに認められることから、器面赤褐色で胎土が灰色のサンドヴィッチ状を呈していたと考える。４は第２層、他の３点は第１層の出土である。

同図12～14に図示した３点は底部で、平底と高台を作るものの２種に大別できる。12・13の２点は平底で、12は立ち上がりが直線的に開くもので、底径約９㎝を測る。器面調整は内外面とも撫でを施しているが、雑で所々に窪みを残している。又、底面は成形時、生乾きのうちに砂の上に置いたような凹凸面を呈する。器壁は全体に薄めで、胎土には石英を主に混入する。焼成は良く、器色は茶褐色を呈する。13も前述したように平底で、器面調整は資料が小さいため明確でないが撫で調整が見られる。焼成は良好で器色は赤褐色を呈する。12・13とも第１層より出土。

同図14は高台を作るもので、底径は約 6.2 ㎝、高台の高さは 0.65 ㎝を測る。畳付は外側で角を作るが、内側では傾斜してスムーズに外底部へ移行する。胎土は本類の中で最も細かく、Ⅲ類に近いもので、石英と赤色粒を混入する。第１層の出土である。

### Ⅲ　類

本類は総数180点検出される。その内訳は、口縁部11点、無文胴部161点、底部３点、その他５点である。口縁部は形態により㋑頸部で折り曲げ「状(かぎ)の口縁部を作るもの（10点）と㋺口縁部が著しく内彎するもの（１点）の２種類がある。以下、図示したものを略述する。

第８図８～10は㋑に属する資料で、９・10には外面に把手を連想させる粘土紐の貼付部分が見られる。口径を測ることができたのは８の１点のみで口径約20㎝を測る。３点とも第１層の出土。

同図11は㋺に属するもので、口縁部は僅かに肥厚し、口唇は舌状を呈する。推算口径は約14㎝を測る。器色は本標品、前記３点とも橙褐色である。第１層より出土。

本類の底部は、同図15～17に図示した３点で、３点とも青磁碗様の高台を作る。15は底径約 4.3 ㎝を測るもので、高台外面の上部には回転削りによると思われる円味の窪みがある。焼成は良好で器色

はは橙褐色を呈する。第１層の出土である。16は断面方形の高台を作るもので、畳付には木目様の痕が見られる。本標品も前記15同様、高台外側の上部に回転によると思われる削りを施しているが、前者よりシャープで断面は「く」の字状を呈する。底径は推算約 7.3㎝を測る。第３層０～10㎝の出土である。17は推算底径 5.2㎝を測るもので、前者に比べ全体に薄手である。第１層の出土。器色・焼成は前者16・本標品とも赤褐色で焼成も良い。16・17の２点は本類の中では焼成・器色・胎土等の特徴がやや異なり、前記Ⅱ類を洗練した感じを受ける。しかし、胎土の洗練やロクロ成形である点より本類に含めた。

その他、本類に属するものに蓋になると思われるもの３点と蓋のつまみになると思われる宝珠（２点）がある。

第９図１・２に図示した２点は蓋の器形が推察されるものである。同図１は蓋の直径約16㎝が推算されるもので、端部で幅 1.5㎝は肥厚する。器面は端部へ移行する箇所で外面が僅かに波状を呈するが、他はほぼ平坦である。胎土は泥質で石英を混入する。器色は器面を磨耗しているため灰色になっているが、本来は内外面で橙褐色、胎土は灰色のサンドヴィッチ状を呈していたと考える。第２層の出土である。同図２は推算径約21㎝を測るもので、諸特徴は前記８・９・10に類似する。第１層より出土。

同図３・４は前述したように、蓋のつまみになると思われるものである。３は前記２、４は前記１に諸特徴が近似する。３は第１層、４は第２層の出土である。

## 8. 須 恵 器

本調査で出土した須恵器は31点で、復元可能なものは得られなかった。その内訳は、口縁部２点、胴部29点で底部の資料はない。全て破片であるが、一様個々の特徴を表現するものとして器面調整により下記の３類に大別して概述する。分類別の出土状況は第５表に示した。

Ⅰ類　平行叩き文が外面に見られるもので、中には内面に格子目叩き文が認められるものもある。

Ⅱ類　外面の平行及び格子目叩き文を撫で消すが、叩き文が消えず所々に叩き文を残すもの。

Ⅲ類　器面に叩き文が見られないもので、中には入念な撫でを施すものもある。

**第５表　須恵器の出土状況**

| 類 / 部位 / 層位 | Ⅰ | | Ⅱ | | Ⅲ | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 口縁 | 胴 | 口縁 | 胴 | 口縁 | 胴 | |
| 第１層 | | 2 | 1 | 4 | 1 | 17 | 25 |
| 2 | | | | | | | |
| 3 0－10 | | | | | | | |
| 10－20 | | 1 | | 2 | | 3 | 6 |
| 20－30 | | | | | | | |
| 計 | | 3 | 1 | 6 | 1 | 20 | 31 |

Ⅰ　類

これに属するものは第９図８～10に示した胴部破片３点のみである。前記３点の裏面に見られる回転擦痕の横走線を水平とした場合、同図８・９は平行叩き文が水平で、同図10は叩き文が斜行する。また、前記８の内面には格子目の叩きも認められる。胎土にはいずれも石灰質微砂粒を混入するが、８・９の２点は砂粒が非常に細かく肉眼観察も容易でない。器厚・焼成・器色は３者ほぼ共通で、器厚は約 4.5 ㎜と薄く、焼成は普通である。器色は器面で青灰色、胎土が赤褐色のサンドヴィッチ状を呈する。10は第３層10～20㎝、８・９は第１層の出土である。

Ⅱ　類

本類に含まれるものは７点ある。うち１点（第９図６）が口縁部の破片で、残りの６点は胴部破片である。胴部破片は４点を第９図11・12と第10図１・２に図示した。

第９図６はゆるやかに外反する口縁部の破片で、端部は断面方形状に僅かに肥厚する。内面には円味を呈する浅い凹線が一条、外面には叩きが認められる。しかし、外面の叩きの種類は判然としない。焼成は良好で器色はサンドヴィッチ状に器面で灰褐色、胎土は赤褐色を呈する。第１層の出土。

同図11・12と第10図１・２の４点は前述したように胴部破片である。外面の叩きの種類がわかるものは、11の格子目叩きと１の平行叩きで、残り４点（図外の２点も含め）は撫で消しているため判然としない。また、内面にも２を除いた３点にそれぞれ異った叩き痕が認められる。１は格子目、他の２点は判然としない。焼成は12の１点がやや悪いものの、残り６点は良好である。器色も前記12の黄褐色以外はほぼ共通し、器面で灰褐色、胎土では赤褐色のサンドヴィッチ状を呈する。11・12は第３層10～20㎝、１・２は第１層の出土である。

Ⅲ　類

これに含まれるものは、口縁部１点、胴部20点の計21点である。以下、特徴的なもの６点を略述する。

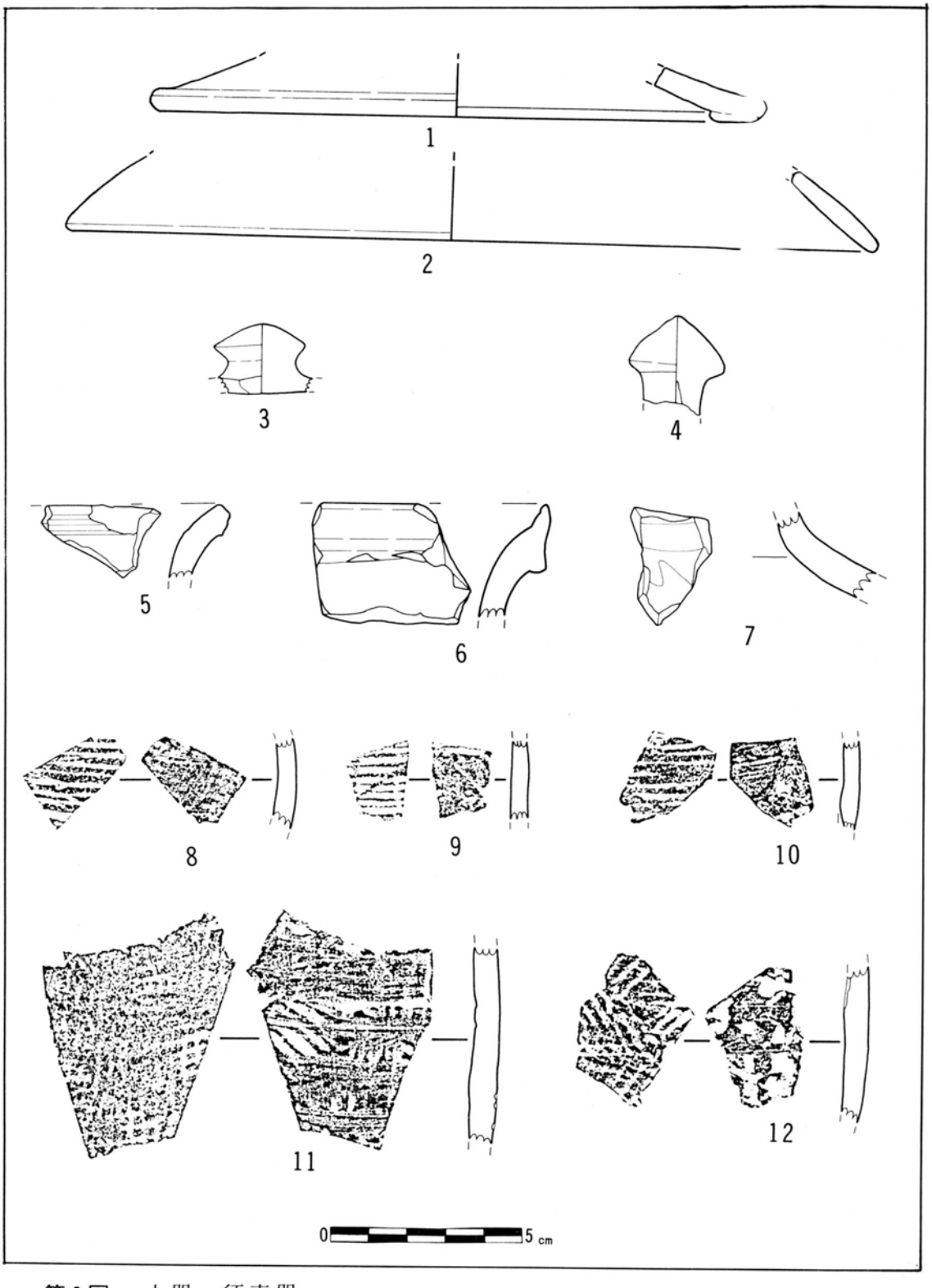
第９図５は口縁部破片でゆるやかに外反し、端部を屈曲して断面三角形状に成形する。しかし、三角形の斜位外面は弧を描く凹面を呈する。器色は器面で青灰色、胎土では赤褐色のサンドヴィッチ状を呈する。焼成は普通である。第１層の出土。

同図７は肩部の破片で波状の沈線が認められるものである。しかし、沈線は浅く、部分的に消える箇所もあることから、文様なのか判然としない。焼成は良好で、器色は前記５に類似する。第３層10～20㎝の出土である。

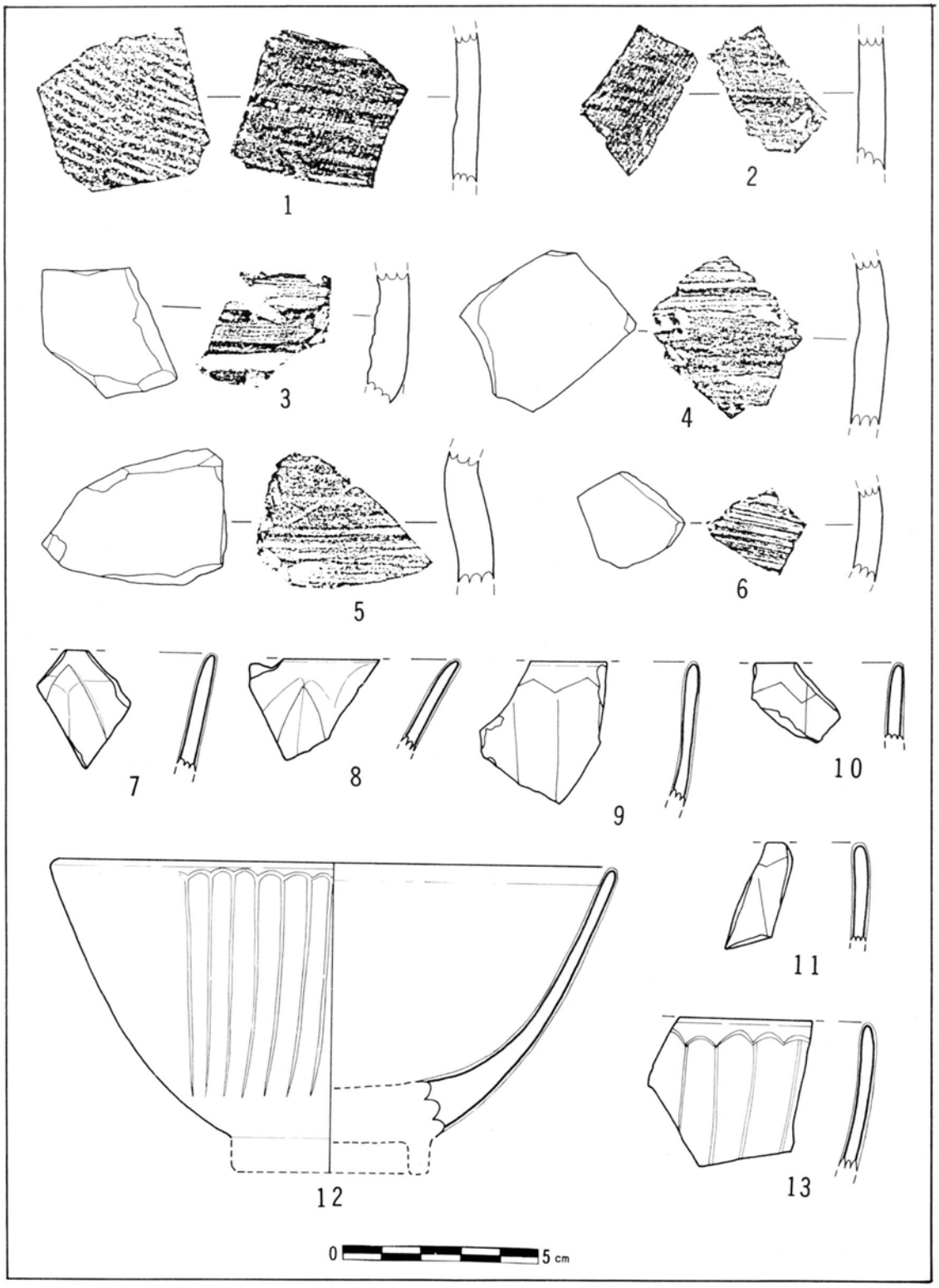
第10図３～６に図示した４点は胴部破片である。いずれも外面は回転撫で様の調整で滑らかであるが、内面は叩き痕・回転擦痕・丸底の凹線と異った調整痕が認められる。３・５は焼成普通、器色は灰色を呈する。４・６は焼成良好で、器色は外面黒褐色、内面灰褐色、胎土赤褐色を呈する。６のみ第３層10～20㎝、他の３点は第１層の出土である。

## 9.　青　　磁

青磁は破片で695点が検出された。それを器種別に見た場合（第６表）、碗152点、皿10点、盤５




**第9図**　土器・須恵器




**第10図**　須恵器・青磁

点、不明528点と器種が推察できるものの中では碗が群を抜いて多い。以下、器種別に概述する。尚、不明が数値的に多い訳は胴部の小破片を1点として数えたためである。

**第6表　青磁器種別出土状況**

| 器種 / 部位 / 層位 | 碗 | | 皿 | 盤 | | 不明 | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 口縁部 | 底部 | 口縁部 | 口縁部 | 底部 | 口縁部 | 胴部 | 底部 | |
| 第1層 | 94 | 11 | 6 | 2 | 1 | 24 | 298 | 9 | 445 |
| 2 | 6 | 3 | 1 | 1 | | 2 | 34 | 1 | 48 |
| 3 0−10 | 6 | 2 | | | | | 21 | 3 | 32 |
| 10−20 | 25 | 2 | 3 | | | 3 | 123 | 5 | 161 |
| 20−30 | 2 | 1 | | 1 | | | 5 | | 9 |
| 計 | 133 | 19 | 10 | 4 | 1 | 29 | 481 | 18 | 695 |

a。碗

碗は前述したように、器種別の出土状況をみたとき最も多いもので152点得られた。しかし、器形を明確に示す資料はなく、全て口縁部あるいは底部の破片である。以下、口縁部より概述する。

**口　縁　部**

口縁部は133点検出されたが、文様と口縁形態より後述の7タイプに大別できる。

Ⅰ類　体部に篦削りの鎬蓮弁文が彫られるものである。口縁は直口で端部では窄まる。

Ⅱ類　剣頭細線蓮弁文を描くもので、口縁は直口で端部は円味を呈する。

Ⅲ類　丸頭蓮弁文を描くもので、諸特徴からさらに細分した。㋑丸頭細縁蓮弁文を描くもの。㋺文様は前記㋑に類似するが、凸文で体部外面が小さく波状を呈するもの。㋩前記㋺に2条の圏線が配されるもの。㋥細線蓮弁文を描くが、前記3者と特徴がやや異なるもの、あるいは前記3者の何れに属するか判然としないもの。口縁形態は㋑、㋺、㋩、㋥とも前記Ⅱに類似する。

Ⅳ類　雷文を描くもので、雷文の描き方と他の文様との組み合わせにより4つに細分した。㋑雷文のみで、雷文は一定方向に描くもの。㋺雷文のみで、雷文は回転方向を中心で逆転させるもの。㋩前記㋑の雷文に篦彫り文（草花文？）を組み合わせるもの。㋥雷文が認められるものの前者の何れに属するかわからないもの。

Ⅴ類　口縁の端部が外反して外見的に肥厚口縁にみえ、体部外面に篦彫り（草花文？）が認められるもの。

Ⅵ類　口縁形態は前記Ⅴに類似して、無文のもの。

Ⅶ類　無文で口縁形態は前記Ⅱに類似するもの。

以下、タイプ別に略述する。

**第7表　青磁碗分類別出土状況**

| 類 / 層位 | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | | | | Ⅳ | | | | Ⅴ | Ⅵ | Ⅶ | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | イ | ロ | ハ | ニ | イ | ロ | ハ | ニ | | | | |
| 第1層 | | 2 | 3 | 2 | 1 | 4 | 1 | 2 | 1 | 3 | 1 | 52 | 17 | 89 |
| 2 | | | | | | 1 | | | | | | 3 | 2 | 6 |
| 3 0−10 | | 1 | 1 | | | | | | | | | 3 | 2 | 6 |
| 10−20 | 2 | 2 | 1 | | | | 1 | | | 2 | | 8 | 8 | 24 |
| 20−30 | | | | | | | | | | | | 1 | | 2 |
| 計 | 2 | 5 | 5 | 2 | 1 | 5 | 2 | 2 | 1 | 5 | 1 | 67 | 29 | 127 |

**Ⅰ　類**

これに属するものは、第10図7・8の2点である。同図7は鎬蓮弁文が1弁認められるもので、蓮弁文は精巧な浮彫りである。蓮弁の幅は判然としないが、弁先は尖っている。第3層10〜20㎝レベルの出土である。

同図8も鎬蓮弁文が1弁みられるものであるが、前記7ほど精巧な浮彫りではない。しかし、蓮弁の鎬は明瞭で縁には箆彫りが認められる。弁端は尖っているが、幅は不明である。前述した箆彫りに接して、別の箆彫りがみられることから本標品は間蓮弁文のグループに属することも考えられる。第2層10〜20㎝レベルの出土である。

**Ⅱ　類**

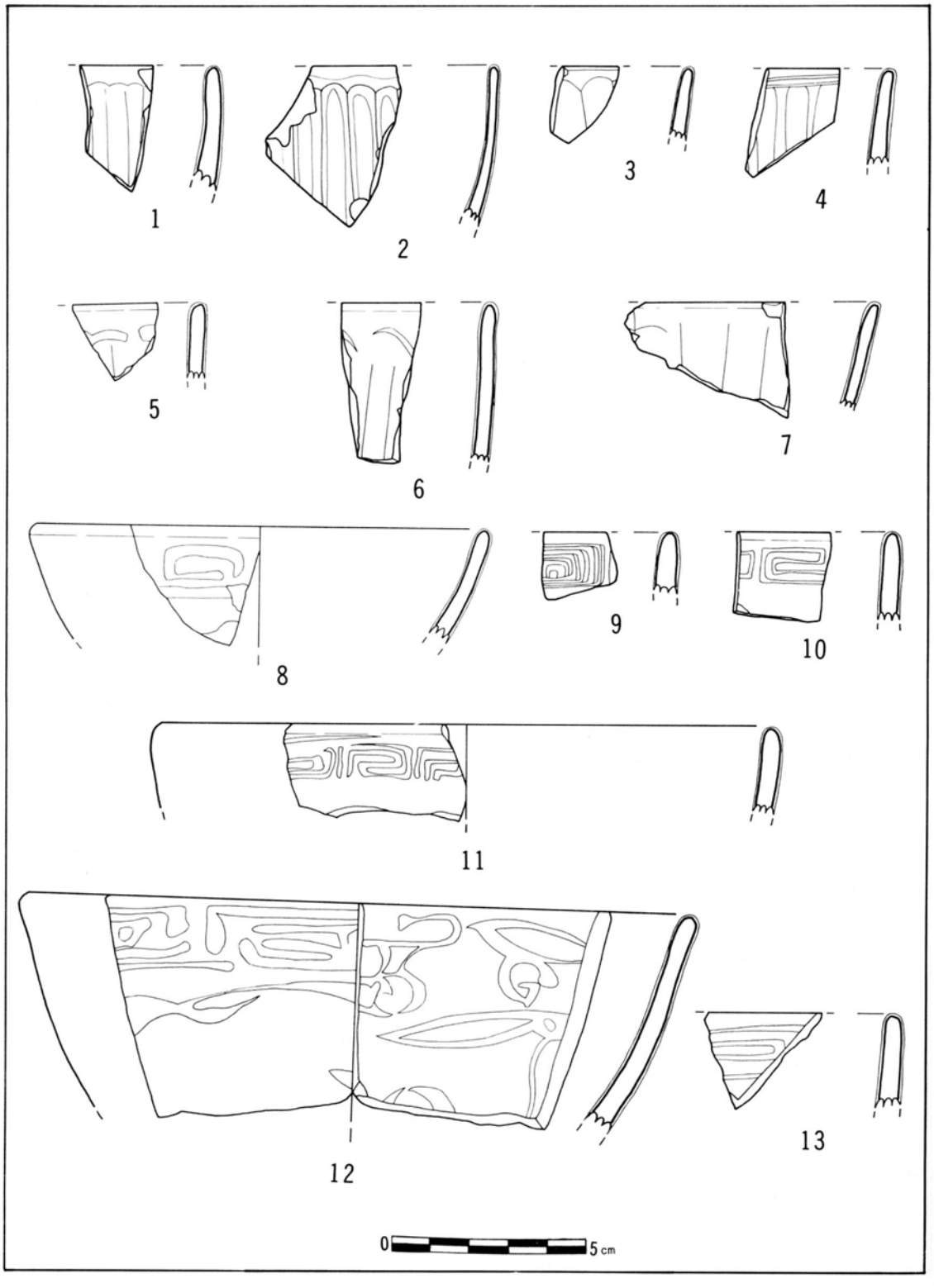
本類に属するものは5点あるが、うち3点を第11図2〜4に示した。3点とも縦位細線と□細線を組み合わせ蓮弁文を描くもので、蓮弁を単位として描く意識は薄れている。同図2・3は第1層、同図4は第3層0〜10㎝の出土である。

**Ⅲ　類**

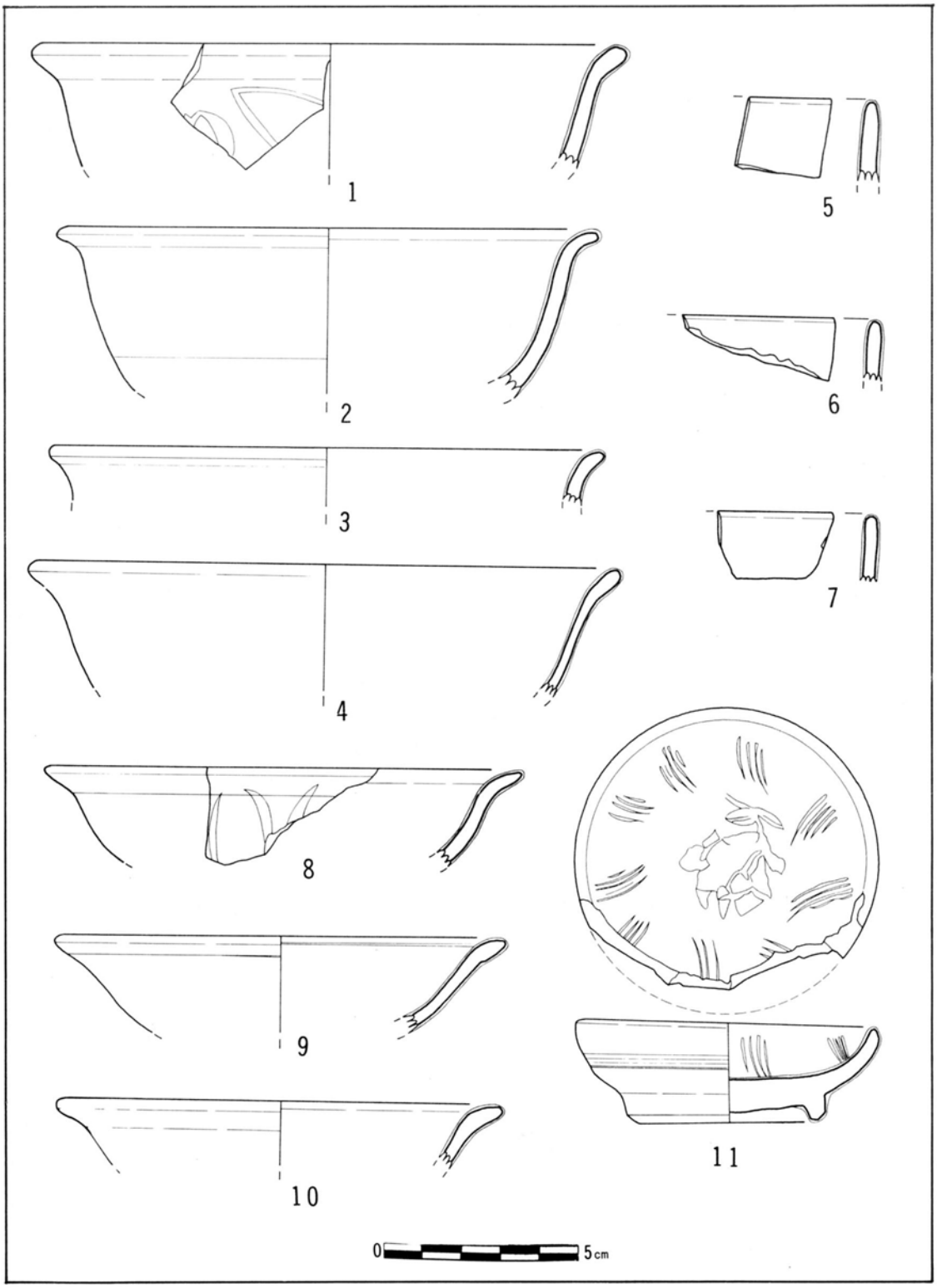
これに属するものは13点得られた。本類は前述したように4つに細分したので、細分別に概述する。

㋑は5点得られたが、うち3点を第9図12・13、第10図1に図示した。第9図12は器形が推察できるもので、体部は直線的に開く。体部外面には箆先で描いた細線蓮弁文が施文されているが、縦位の線と横走する波状文の谷間とは必ずしも一致してない。口径は約14.7㎝、器高は推算約8㎝を測る。第1層の出土である。

同図13も前記6と同様の細線蓮弁文を彫るが、弁の幅は前者よりやや広い。第1層の出土。




**第11図**　青　　磁




**第12図**　青　　磁

第11図１はシャープな細線で丸頭を一弧一弧描く蓮弁文を施文するが、弧端は縦位線と必ずしも一致していない。第１層の出土である。

㋺は同図２・３の２点で、蓮弁文はそれぞれしっかりしている。弁幅は２点とも広くはないが、両者を比較したとき後者３がやや広い感じを受ける。２点とも第１層の出土である。

㋩に属するものは、前者㋺に文様は類似するが、蓮弁文の丸頭部が２条の圏線に取って変るものである。同図４の１点で、第１層の出土である。

㋥に属するものは５点検出されたが、文様が鮮明な３点を同図５～７に示した。

同図５は縦位細線と篦彫りの横位弧が認められるものである。横位弧は一部つながるが、連弧しておらず、縦位細線と弧の谷間も一致してない。前記㋑に含めるべき資料かと考えるが、判然としないためここで扱った。第３層10～20㎝の出土である。

同図６は縦位細線の上位に短曲線を描くもので、第３層20～30㎝の出土である。

同図７は４本の縦位細線と横位弧細線がみられるものである。前記㋑がさらに簡略化したものと考えるが、判然としないため一様ここに含めた。第２層の出土である。

### Ⅳ　類

本類は10点出土したが、うち６点を第11図８～13に図示した。本類も前述したように、雷文の描き方と組み合わせにより㋑２点、㋺２点、㋩１点、㋥５点の４つに細分した。以下、分類別に略述する。

㋑は第11図８・９の２点である。同図８は器面が磨耗しているため文様は判然としないが、時計回りに１回転する雷文と篦彫り様の横走線が雷文下位に見られる。推算口径は約12㎝を測る。

同図９は雷文が６回転するもので、雷文は横線で細く、縦線で太く描くが、回転方向は判然としない。第１層の出土である。

㋺も同図10・11に図示した２点である。同図10は雷文が２単位みられるが、連続はしていない。第１層の出土である。同図11も雷文が３単位みられるものの、それぞれ独立するものである。口径は推算約 16.3㎝を測る。 第１層の出土である。

㋩は同図12に示した１点で、外面体部に時計回りの２単位の雷文と篦彫り文、内面には草花文が彫られている。外面体部の篦彫り文の構図は判然としないが、一般的に雷文の下方にはラマ式蓮弁文や草花文が配される。第１層の出土である。

㋥に属するものは５点得られたが、うち１点を同図13に図示した。本標品は１単位の雷文が認められるものの、雷文の両端を欠くため雷文の性格は明確でない。第１層の出土である。残りの４点は資料がさらに小さいため、雷文とわかるだけでそれ以上の特徴は窺(うかが)えないので省略した。

### Ⅴ　類

第12図１に図示した１点で、外面体部に草花文と思われる篦彫りが見られる。第１層の出土で推算口径は 15.5㎝を測る。

### Ⅵ　類

総数67点検出されたがほとんど小破片のため、口径推算できる３点を第12図２～４に図示した。

同図２は本類の中でも外反が著しいもので、断面は「く」の字状を呈する。口径は約14㎝を測る。第１層の出土である。同図３・４は、本類の一般的なもので外反して外見は肥厚口縁に見える。３は口径約 14.5㎝、 第２層の出土である。４は口径約15.5㎝で第3層20～30㎝の出土である。

### Ⅶ　類

総数29点得られたが、うち３点を第12図５～７に図示した。いずれも前記Ⅱ類の口縁形態に類似して直口で端部では円味を呈するが、文様は認められない。同図５・６は第１層、同図７は第２層より出土した。

以上、口縁部の資料を概述した。次に碗底部を略述する。

### 底　　部

碗の底部は19点検出された。これらを高台の作りで大別して、施釉の範囲を加えて検討を試みることにした。高台は全て広義の竹節高台に包含されるが、竹節部分の削り具合より後述の３種に一様細分した。尚、高台を欠くものは不明とした。

㋑　竹節であるが、畳付への傾斜が短い（２㎜以下）もの。

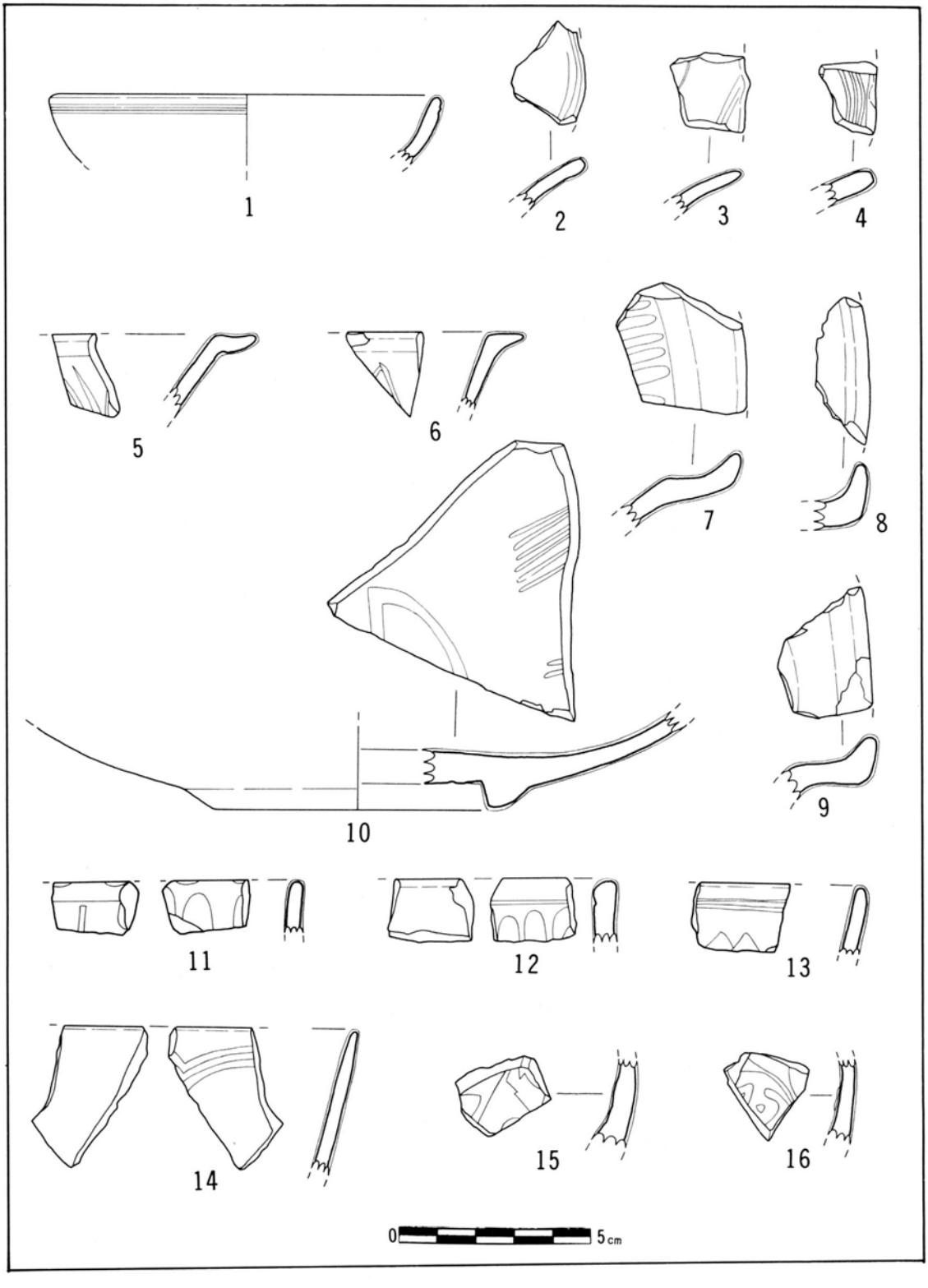
㋺　一般的な竹節高台で、ある程度の傾斜面（２～５㎜）を有するもの。

㋩　前記㋑、㋺の一段削りではなく、二段削りで竹節を作るもの。

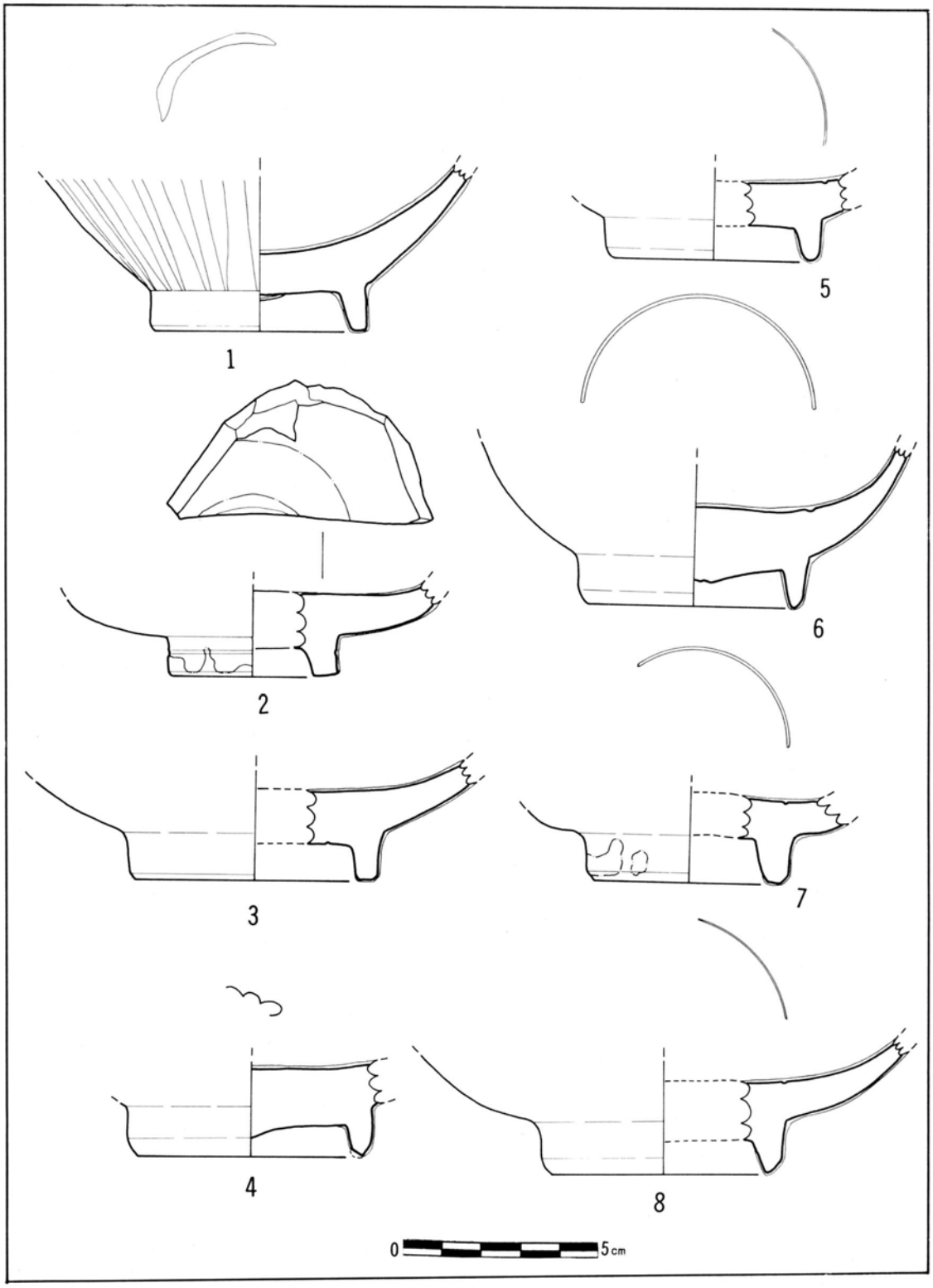
分類別の出土状況は第８表に示した。以下、特徴的なものをピックアップして概述する。

**第８表　青磁碗底部の高台形態別出土状況**

| 形態 ＼ 層位 | ㋑ | ㋺ | ㋩ | 不明 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第１層 | 3 | 6 | 1 | 1 | 11 |
| 2 | | 3 | | | 3 |
| 3 0－10 | | 2 | | | 2 |
| 10－20 | | 2 | | | 2 |
| 20－30 | | 1 | | | 1 |
| 計 | 3 | 14 | 1 | 1 | 19 |




**第13図**　青　　磁




**第14図　青　　磁**

**第９表　青磁碗底部の高台形態別施釉状況**

| 施釉範囲＼形態 | | ㋑ | ㋺ | ㋩ | 不明 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 1 | 1 | 1 | | 3 |
| | | 1 | | | | 1 |
| | a | | 4 | | | 4 |
| | b | | 5 | | | 5 |
| | | 1 | 3 | | 1 | 5 |
| | | | 1 | | | 1 |
| 計 | | 3 | 14 | 1 | 1 | 19 |

㋑に属するものは第14図１～３の３点である。同図１は外面体部に箆彫りの蓮弁文、内底には構図の判然としない箆彫りがみられる。釉は高台の内側まで施釉するが、畳付では掻き取っている。尚、外底の中央には付着土が見られる。第１層の出土である。同図２は内底の釉を輪状に掻き取るもので、輪内の施釉部には細い圏線が認められる。高台での施釉は高台外面止まりであるが、外底にも釉が一部認められる。第１層の出土である。

㋺これに属するものは第14図４～８と第15図１～９に図示した13点である。その中には、内底に圏線が配されるもの４点（第14図５～８）と内底に細線文を彫るもの（文様構図不明）、第14図４の１点を含んでいる。

㋩は第15図10に図示した１点である。内底の円状露胎部に印花文をスタンプするが、印文は浅く不鮮明で構図も判然としない。露胎外側の施釉部には圏線も認められる。第１層の出土である。

**第10表　青磁碗底部のサイズ**

| 底径(cm) ＼ 形態 | イ | ロ | ハ | 不　明 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 4 ～ 4.9 | 1 | | | | 1 |
| 5 ～ 5.9 | 1 | 5 | | | 6 |
| 6 ～ 6.9 | 1 | 7 | 1 | 1 | 10 |
| 7 ～ 7.9 | | 2 | | | 2 |
| 計 | 3 | 14 | 1 | 1 | 19 |

**第11表　青磁碗口縁部の釉色**

| 色調 ＼ 類 | | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | | | | Ⅳ | | | | Ⅴ | Ⅵ | Ⅶ | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | イ | ロ | ハ | ニ | イ | ロ | ハ | ニ | | | | |
| 青　緑 | a | | 1 | | | | | | | | | | 6 | 1 | 8 |
| | b | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 |
| オリーブ | a | | | | | | 1 | | | | | | 8 | 3 | 12 |
| | b | | 1 | | 2 | 1 | | | 1 | 1 | 1 | | 14 | 10 | 31 |
| く　さ | a | 1 | 2 | | | | | | | | 3 | | 12 | | 18 |
| | b | | 1 | 3 | | | 3 | 1 | 1 | | 1 | 1 | 18 | 11 | 40 |
| 深　緑 | a | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 |
| | b | | | | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| りきゅう(らくだ) | a | | | 1 | | | | | | | | | 3 | 1 | 5 |
| | b | 1 | | | | | | | | | | | 2 | 1 | 4 |
| 不　明 | | | | | | | 1 | | | | | | 4 | | 5 |
| 計 | | 2 | 5 | 5 | 2 | 1 | 5 | 2 | 2 | 1 | 5 | 1 | 67 | 29 | 127 |

注：aはやや透明、bは淡い。

以下、不明は省略した。尚、前述した細分別のサイズ（底径）と施釉状況を第10表と第11表に示した。第10表から見た場合、本遺跡出土の青磁碗底部は㋑に属する一般的な竹節高台で高台内側まで施釉するものが多い。サイズは前記細分の㋑・㋩は数が少ないため傾向を摑めないが、㋺は底径約5～6.9㎝の範疇に大半がおさまる。

**碗の諸特徴**

碗の色調と貫入の状況を第11、12、13、14表に示した。

**第12表　青磁碗口縁部の釉色と貫入の状況**

| 貫入＼色調 | | 青緑 | | オリーブ | | くさ | | 深緑 | | りきゅう（らくだ） | | 不明 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | a | b | a | b | a | b | a | b | a | b | | |
| 有 | 粗い | 1 | 2 | 4 | 9 | 7 | 18 | | | 1 | 1 | | 43 |
| | 細い | 5 | | 4 | 9 | 3 | 7 | | | 4 | 1 | 1 | 34 |
| 無 | | 2 | | 4 | 13 | 8 | 14 | 1 | 1 | | 2 | | 45 |
| 不明 | | | | | | | 3 | | | | | 2 | 5 |
| 計 | | 8 | 2 | 12 | 31 | 18 | 42 | 1 | 1 | 5 | 4 | 3 | 127 |

注：aはやや透明、bは淡い。

**第13表　青磁碗底部の釉色**

| 高台形態＼釉色 | 青緑 | | オリーブ | | くさ | | 深緑 | | りきゅう（らくだ） | | 不明 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | a | b | a | b | a | b | a | b | a | b | | |
| ㋑ | | | | 1 | | | 1 | | | | 1 | 3 |
| ㋺ | 1 | | | | 3 | 8 | | 1 | | | 1 | 14 |
| ㋩ | | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| 不明 | | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| 計 | 1 | | 1 | 2 | 3 | 8 | 1 | 1 | | | 2 | 19 |

注：aはやや透明、bは淡い。　。

**第14表　底部の色調と貫入の状況**

| 貫入の有無＼色調 | | 青緑 | | オリーブ | | くさ | | 深緑 | | りきゅう（らくだ） | | 不明 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | a | b | a | b | a | b | a | b | a | b | | |
| 有 | 粗い | 1 | | | | 1 | | 1 | | | | | 3 |
| | 細い | | | | 2 | 1 | 4 | | | | | | 7 |
| 無 | | | | 1 | | 1 | 4 | | 1 | | | | 7 |
| 不明 | | | | | | | | | | | | 2 | 2 |
| 計 | | 1 | | 1 | 2 | 3 | 8 | 1 | 1 | | | 2 | 19 |

注：aはやや透明、bは淡い。

b．皿

皿は第15表に示したように10点検出された。第12図11のほぼ完形品（1点）を除くと、全て口縁部の破片である。口縁破片はかたむきと類似資料との比較より、器形をある程度推察することは可能である。以下、皿を器形で4種に大別して略述する。

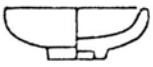
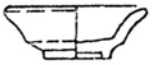
Ⅰ類　腰の部分より「S」字状の曲線を描き外反するもの。

Ⅱ類　幅広の腰部より口縁がほぼ直口するもの。

Ⅲ類　一般的に稜花皿と呼ばれているもので、腰で角を作り、体部上部は内彎する弧を描くように外反する。

Ⅳ類　口縁部を水平に折り曲、平坦面を作るものである。腰は張り、体部はやや直線に開く。

**第15表　青磁皿器形別出土状況**

| 層位＼器形 | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| | |  |  | | |
| 第1層 | 2 | | 2 | 2 | 6 |
| 2 | | 1 | | | 1 |
| 3 0－10 | | | | | |
| 10－20 | 1 | 1 | 1 | | 3 |
| 20－30 | | | | | |
| 計 | 3 | 2 | 3 | 2 | 10 |

第16表　青磁皿の器形と文様の状況

| 文様＼器形 | | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 有文 | 箆彫り蓮弁文 | 1 | | | 1 | 2 |
| | 線彫り＋印花文 | | 1 | | | 1 |
| | 線彫り | | | 3 | 1 | 4 |
| | 圏線 | 1 | 1 | | | 2 |
| 無文 | | 1 | | | | 1 |
| 計 | | 3 | 2 | 3 | 2 | 10 |

Ⅰ　類

これに属するものは第12図８～10に図示した３点である。同図８は体部外面に箆彫りの蓮弁文が見られるもので、推算口径は約 12.4㎝を測る。第３層10～20㎝の出土である。同図９は端部を磁胎で肥厚口縁状に削り、施釉で滑にするものである。口縁内面には２条の圏線が見られる。推算口径は約11.7㎝で第１層の出土である。同図10は口径・出土層位が前者９と一致するが、文様は見られない。

Ⅱ　類

第12図11・第13図１に図示した２点で、同図11は口縁の一部を欠くが、ほぼ完形の資料である。内面には４・５本単位の長線を９組、口縁より内底側に描き、さらに内底に印花文をスタンプしている。外面体部にもシャープな線彫りが幅をもって認められるものの、文様的要素は薄く一部判然としない箇所もある。釉は高台内側まで施釉する。第２層の出土である。同図１は外面の口縁沿に２条の圏線が配されるもので、第３層10～20㎝より出土した。

Ⅲ　類

第13図２～４に図示した口縁部の小破片３点である。３点とも口縁沿いに２・３本の線彫りが認められるのみである。同図２は第３層10～20㎝、同図３・４は第１層の出土である。

Ⅳ　類

第13図５・６の２点で、同図５は２本を単位とする線彫り、同図６には蓮弁文が想定される線彫りが認められる。両者とも第１層の出土である。

尚、皿の釉色と貫入の状況は第17表と第18表に示した。

**第17表　青磁皿器形と色調**

| 色調 / 器形 | イ 青緑 | | ロ オリーブ | | ハ くさ | | ニ 深緑 | | ホ りきゅう | | ヘ 不明 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | a | b | a | b | a | b | a | b | a | b | | |
| Ⅰ | | | | 1 | 2 | | | | | | | 3 |
| Ⅱ | | | | 1 | 1 | | | | | | | 2 |
| Ⅲ | | | | 2 | 1 | | | | | | | 3 |
| Ⅳ | | 1 | | | 1 | | | | | | | 2 |
| 計 | | 1 | | 4 | 5 | | | | | | | 10 |

注：aはやや透明、bは淡い。

**第18表　青磁皿の色調と貫入**

| 色調 / 貫入 | | イ 青緑 | | ロ オリーブ | | ハ くさ | | ニ 深緑 | | ホ りきゅう | | ヘ 不明 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | a | b | a | b | a | b | a | b | a | b | | |
| 有 | 粗い | | | | 1 | 1 | | | | | | | 2 |
| | 細い | | | | 2 | 2 | | | | | | | 4 |
| 無 | | | 1 | | 1 | 2 | | | | | | | 4 |
| 不明 | | | | | | | | | | | | | |
| 計 | | | 1 | | 4 | 5 | | | | | | | 10 |

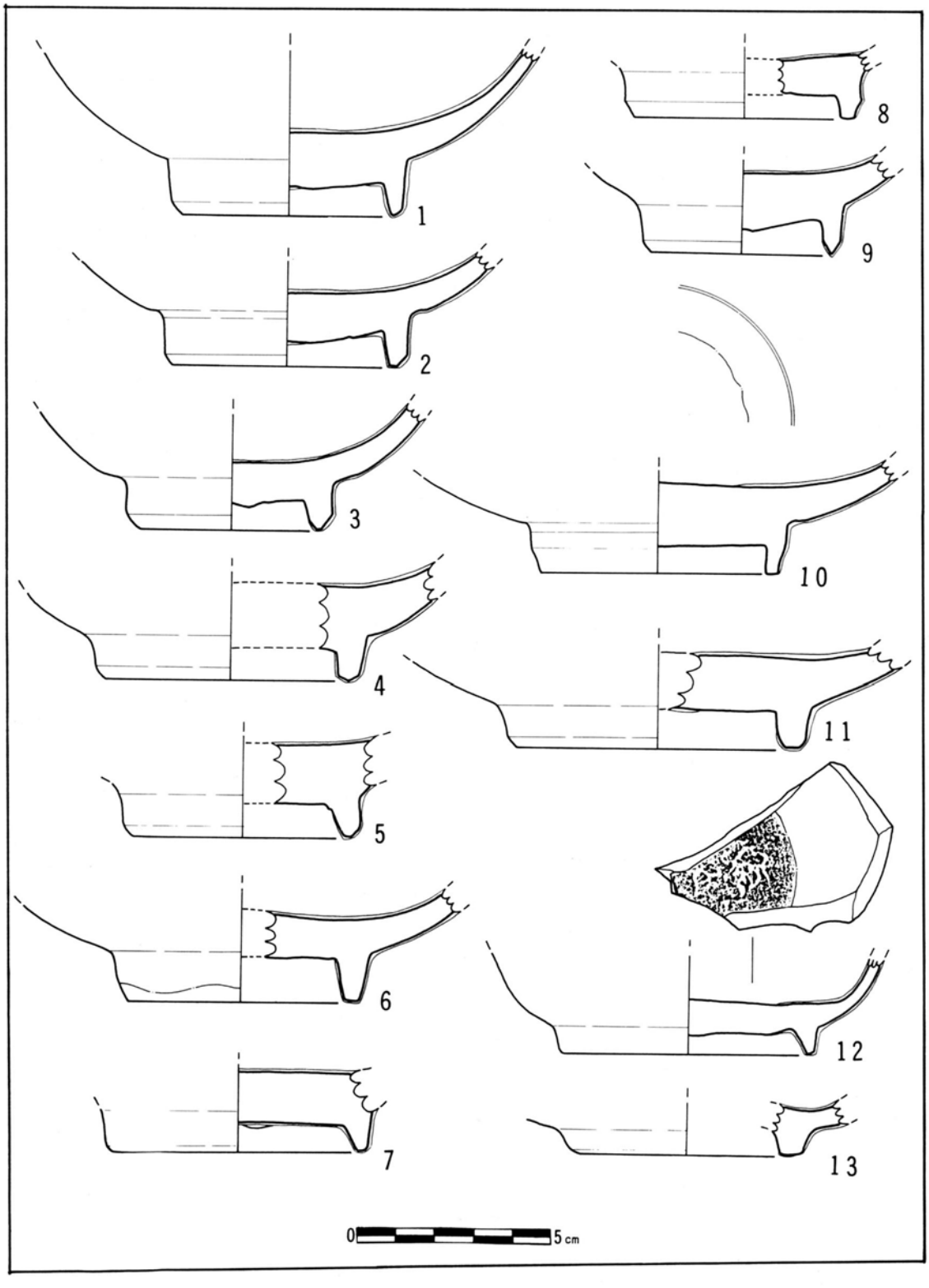
注：aはやや透明、bは淡い。

**c　盤**

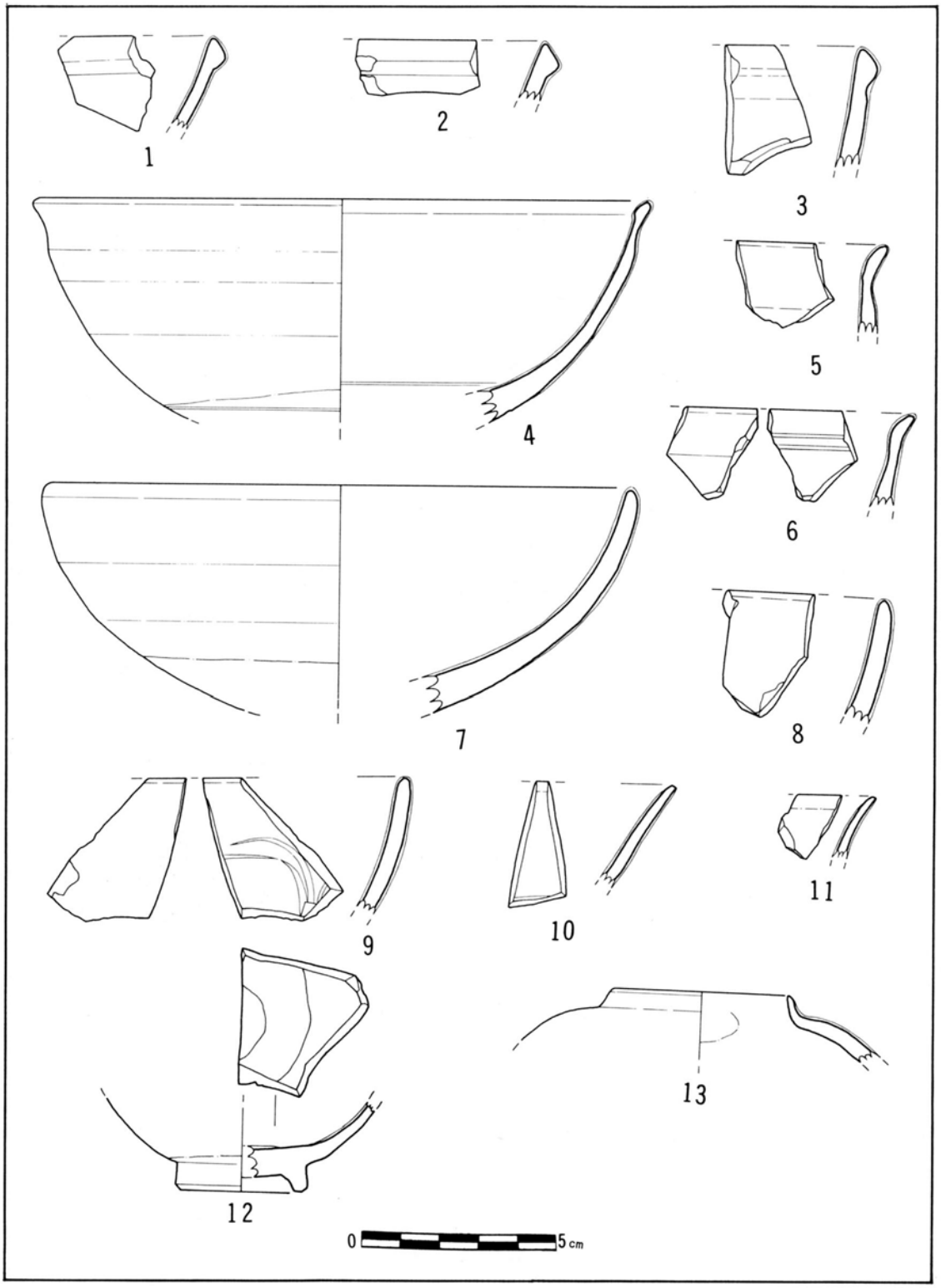
盤と推察できるものは口縁部4点、底部1点が検出された。そのうち口縁部3点を第13図7～9に、底部1点を同図10に図示した。

同図7～9の口縁部3点は、いずれも端部を上方に引き上げるもので、同図7の内面には丸彫りの蓮弁文が認められる。釉色は淡い若草色で、粗い貫入が走っている。胎土は灰白色を呈する。第1層の出土である。同図8は釉色が深い緑色を呈するもので、貫入は釉の薄い口唇部付近にのみ見られる。胎土は薄い灰白色、第3層20～30㎝の出土である。同図9は淡い草色の釉が施釉されているもので、釉には細かい貫入が見られる。胎土は灰白色で第1層の出土である。

同図10の底部は体部内面に線彫り、内底には箆彫りが認められるものの、釉が淡いオリーブ色を呈するため文様は判然としない。釉には細かい貫入が見られ、施釉は高台の内側までしている。第1層の出土である。




第15図　青　　磁




第16図　白　　磁

d　器種不明

小破片のため器種が判然としないもので、口縁部29点、胴部481点、底部18点が得られた。そのうち、口縁部4点（第13図11～14）、胴部2点（同図15・16）、底部3点（第15図11～13）を図示した。以下、口縁部の資料より略述する。

第13図11～14の4点は前述したように口縁部の破片で、11は外面に縦位の線彫り、内面には丸彫りの蓮弁文、さらに口唇部にも横断する丸彫りが認められる。第1層の出土である。12は内面にのみ丸彫りの蓮弁文と圏線が認められるもので、第3層10～20㎝より出土した。14も内面にのみ文様が認められるもので、弧を描く2組の線彫りが見られる。第1層の出土である。13は外面にのみ文様が見られるもので、2条の圏線と箆彫りの浮文が認められる。第1層の出土である。

同図15・16は胴部の破片で、2点とも内面のみに浮文が認められる。しかし、小破片のため構図は判然としない。15は第3層10～20㎝、16は第1層より出土した。

第15図11～13の3点は底部の資料である。11は立ち上がりを見た時、盤が推察されるものである。釉は深緑色で内底にまで施釉するが、内底では掻き取っている。底径は推算約7.5㎝、第3層0～10㎝の出土である。12は内底の円形露胎部に印花文が認められるものである。しかし、内底の露胎は印花文に釉が掛かって点や露胎が滑面を呈している点などから釉を掻き取ったと推察される。釉はりきゅう色（らくだ色）で高台の内側にまで施釉する。本標品は底部からの立ち上がりが、垂直に近いことより碗形以外の底が深い器種が想定される。底径は推算約6.8㎝で、第1層の出土である。13は淡いオリーブ色の釉が、高台の外側まで施釉されるものである。しかし、畳付には重ね焼きの釉着が見られる。高台が低い点からすると皿的な器種の底部であろうか。底径は約6.3㎝で、第3層10～20㎝の出土である。

## 10.　白　　磁

総数76点が検出された。これを器種別にみた場合（第19表）、碗13点、皿6点、盃1点、壷1点、不明55点と器種がわかるものは少ない。以下、一様器種別に略述する。

**第19表　白磁器種別出土状況**

| 器種 / 部位 / 層位 | 碗 | | 皿 | | 盃 | 壷 | 不明 | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 口縁部 | 底部 | 口縁部 | 底部 | 底部 | 口縁部 | 口縁部 | 胴部 | 底部 | |
| 第1層 | 5 | 2 | 2 | 1 | | 1 | 9 | 29 | 1 | 50 |
| 2 | 1 | | 1 | | | | 1 | 2 | | 5 |
| 3 0－10 | 2 | | | | | | 1 | 2 | 1 | 6 |
| 10－20 | 3 | | 1 | 1 | 1 | | 1 | 6 | 1 | 14 |
| 20－30 | | | | | | | | 1 | | 1 |
| 計 | 11 | 2 | 4 | 2 | 1 | 1 | 12 | 40 | 3 | 76 |

a　碗

これに属するものは前述したように13点で、その内訳は口縁部11点、底部２点である。器形がある程度推察できるもの２点（第16図４・８）を含むが、口縁部については形態より３者に大別した。

Ⅰ類　いわゆる玉縁口縁といわれているもので、口縁は断面三角状に肥厚する。

Ⅱ類　体部上位より端部にかけて、緩やかな凹面を作って外反するもの。

Ⅲ類　直口で端部は円味を呈する。

以下、分類別に略述する。一様、出土状況を第20表に示した。

**第 20 表　白磁碗の口縁形態別出土状況**

| 口縁形態 ＼ 層位 | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 第　1　層 | | 2 | 2 | 4 |
| 2 | | 1 | | 1 |
| 3　0－10 | | 1 | 1 | 2 |
| 10－20 | 3 | | | 3 |
| 20－30 | | | | |
| 計 | 3 | 4 | 3 | 10 |

Ⅰ　類

第16図１～３の３点で、口縁部は断面三角形状に肥厚する。釉は３点とも薄い青白色、胎土は同図１・２が乳白色、同図３は灰味をおびた白色を呈する。３点とも第３層10～20㎝の出土である。

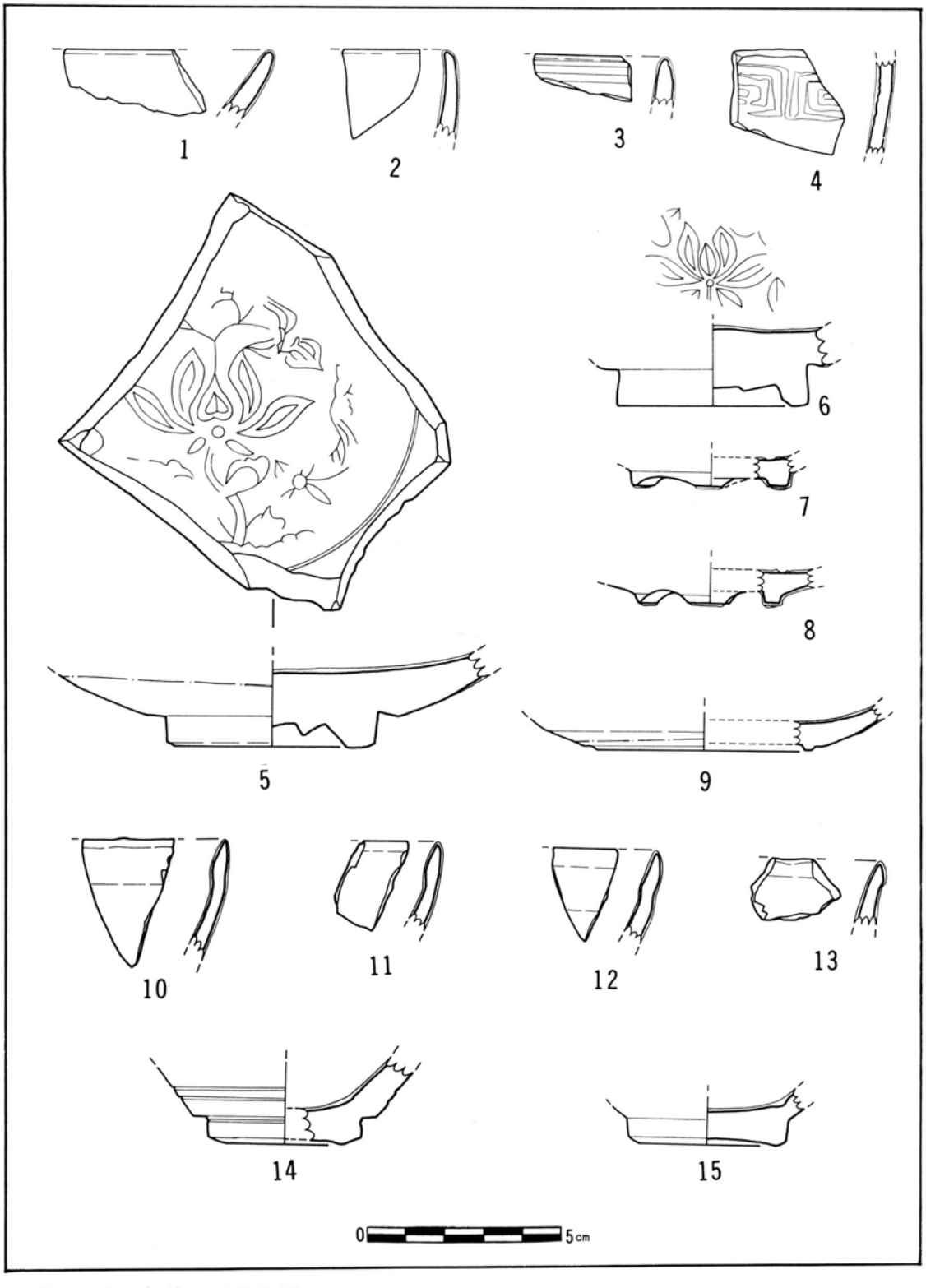
Ⅱ　類

これに属するものは４点得られたが、うち３点を第16図４～６に図示した。同図４は体部の器形がほぼ推察できるもので、外部下方よりやや外彎しながら立ち上がり、上方で緩やかな凹面を作って外反する。体部には外面で横走する数本の稜線、内面では下方に圏線が認められる。施釉は外面で体部下方で止っているが、内面は判然としない。この種の資料は一般的に内面を全て施釉することから、本標品もその例に含まれると考えてよいであろう。釉は灰白色、胎土は灰味をおびた白色を呈する。釉には細かい貫入も見られる。

同図５・６は口縁部の破片である。６の内面には２条の圏線が認められ、釉は薄い青白色、胎土は灰白色を呈する。第１層の出土である。５は無文で釉が灰白色、胎土は灰味をおびた白色を呈する。第２層の出土である。

Ⅲ　類

第16図７～９に示した３点である。同図７の１点は底部を欠くものの、器形がほぼ推察できるものである。底部より外彎して立ち上がり、口縁では直口状を呈する。しかし、体部外面には稜線が３本横走する。釉は内面では内底までの施釉が推察されるが、外面では体部下方で止っている。胎土・釉とも灰白色で、細かい貫入が走っている。第１層の出土である。同図８は釉が薄い青白色、胎土は灰味をおびた白色を呈する。貫入は見られない。第３層０～10㎝の出土である。同図９は内面に篦彫りが認められるが、構図は判然としない。本標品も前者８同様、胎土・釉とも灰白色を呈する。しかし、前者より釉に光沢があり、貫入も見られない。第１層の出土である。




**第17図**　白磁・黒釉陶器

**底　　部**

碗底部と考えられるものは、第17図５・６に図示した２点が得られた。２点とも高台は外側をほぼ直立、内側はやや斜めに削る。胎土・釉とも灰白色で体部外面の下方まで施釉し、それ以下の高台は露胎にする。内底も施釉しているが、そこには蓮花文の印花文が写実的にスタンプされている。底径の推算は、同図５が約 5.5 ㎝、同図６は約５㎝を測る。両者とも第１層の出土である。

尚、本標品は前記口縁部Ⅱ類の底部と考えられる（註４）。

**ｂ　皿**

皿は前述しように６点得られたが、類似資料との比較より２種に大別される。

Ⅰ類　底部より直線的に開く器形で、口唇部の釉は掻きとる。一般に口禿げといわれているものである。

Ⅱ類　高台の４・５箇所に弧状の抉り込みを入れるもので、口縁は高台の付根より直線的に大きく開く。

第21表に分類別の出土状況を示した。以下、Ⅰ・Ⅱ類の順に略述する。

**第 21 表　皿器形別出土状況**

| 器形 / 層位 | Ⅰ | Ⅱ 口縁部 | Ⅱ 底部 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 第１層 | 1 | 1 | 1 | 3 |
| 2 | | | | |
| 3 0－10 | | | | |
| 10－20 | | 1 | 1 | 2 |
| 20－30 | | | | |
| 計 | 1 | 2 | 2 | 5 |

**Ⅰ　類**

これに属するものは、第16図10・11の２点が得られた。２点とも胎土・釉とも灰白色で、第１層の出土である。

**Ⅱ　類**

これに属するものは、口縁部２点、底部２点の４点が得られた。本類の特徴を示めす底部２点のみを第17図７・８に図示した。２点とも胎土は乳白色、釉は灰白色を底する。細かい貫入が同図７にみられるが、同時８は高台の部分だけなので判然としない。７は底径約 3.8 ㎝で第１層の出土、８は底径約 4.2 ㎝で第３層10～20㎝の出土である。両者とも高台の弧状抉り込みが４あるいは５箇になるか判然としないが、図の上では４箇所で復元を試みた。

**ｃ．盃**

第16図12に示した底部１点のみである。器形は高台より外彎して立ち上がるものの、体部上方を欠くため全形は不明である。高台は竹節状に作るが、やや雑でバランスは悪い。釉は外面で体部下方、内面では内底まで施釉するが、内底で輪状に釉を掻き取り露胎にしている。胎土・釉とも乳白色で、釉には細かい貫入がみられる。底径は推算約 3.4 ㎝を測る。第３層10～20㎝より出土。

d．壷

第16図13に図示した口縁部の破片１点のみで、小形の壷が推察される。肩部は丸く張り、頸部で折れ曲って口縁は僅かに内傾する。しかし、口縁外側のコーナを削って小さな傾斜を作っているため、口縁がより内傾しているよに見える。釉は灰白色で、外面にのみ施釉するが、口縁では釉を掻き取り、いわゆる口禿げになっている。内面は露胎であるが、部分的に釉が付く箇所もある。胎土は乳白色を呈する。口径は推算約 4.8 ㎝で、第１層の出土である。

e．器種不明

破片のため器種を推察し得ないものをここにまとめた。口縁部12点、胴部40点、底部３点の計55点が検出されたが、うち５点を第17図１～４と同図９に図示した。

同図１～３は口縁部の破片で、端部に移行するに連れ厚さをやや減じ、口唇部では円味を呈する。１は釉・胎土とも淡い灰白色で、細かい貫入が見られる。第３層10～20㎝の出土である。２は端部での厚さに変化は少ないが、端部は内面で角を作り、外面では円味を呈する。釉は灰白色、胎土は黄味のある灰色で第１層の出土である。３は口縁に沿って２条の圏線が施文されているもので、釉・胎土とも奇麗な灰白色を呈する。第１層の出土である。

同図４は胴部破片で、内面に雷文が２単位彫られている。雷文は２単位とも半欠のため詳細は判然としないが、一定方向に描いているように見える。釉は淡い青白色、胎土は灰白色を呈する。釉に貫入は見られない。第１層の出土。

同図９は底部の破片である。底部と体部の接点付近を削って小さい高台を作るが、高台の外側では一部体部と連続する。釉は淡い灰白色、胎土は黄味の乳白色を呈する。底径は推算約 5.6 ㎝で第１層の出土である。

## 11. 黒釉・褐釉陶器

黒釉および褐釉陶器は総数 133 点得られたが、全て小破片で特徴的な資料は少ない。以下、黒釉陶器と褐釉陶器に大別して略述する。一様、部位別の出土状況を第22表を示した。

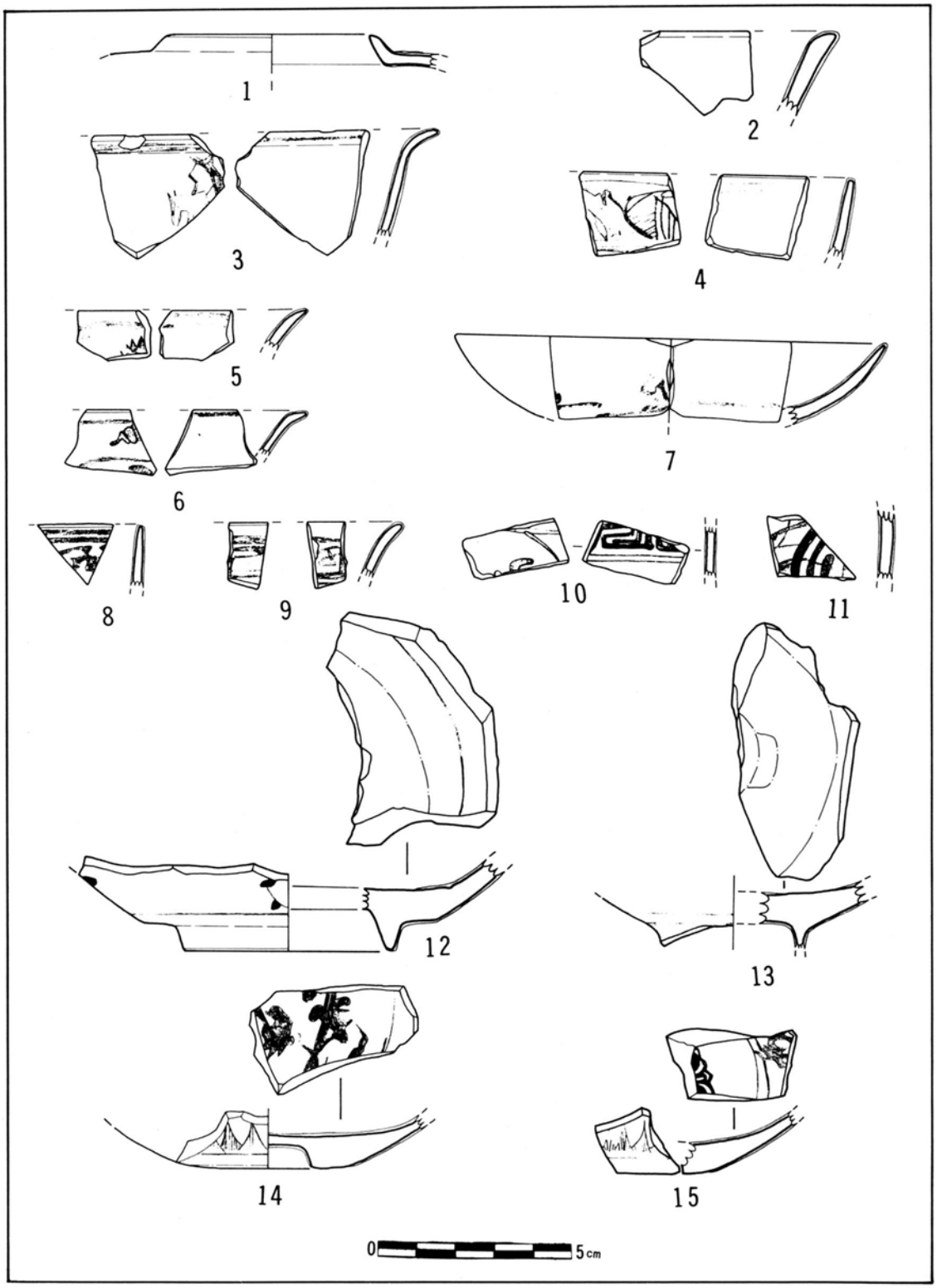
第 22 表　黒釉・褐釉陶器出土状況

| 種類 | 黒釉陶器 | | | 褐釉陶器 | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 器種及び部位 | 天目茶碗 | | | 壷 | 器種不明 | | |
| 層位 | 口縁部 | 胴部 | 底部 | 口縁部 | 口縁部 | 胴部 | |
| 第１層 | 6 | 7 | 1 | 1 | 4 | 71 | 90 |
| 2 | 1 | 2 | | | | 4 | 7 |
| 3 0－10 | | 7 | | | | 8 | 15 |
| 10－20 | 1 | 4 | 1 | | 1 | 13 | 20 |
| 20－30 | | 1 | | | | | 1 |
| 計 | 8 | 21 | 2 | 1 | 5 | 96 | 133 |

a．黒釉陶器

一般に、天目といわれている碗の小破片が31点得られた。その内訳は、口縁部９点、胴部21点、底部２点である。以下、特徴を示めす６点を図示した。

第17図10～13の４点は口縁部破




**第18図**　褐釉陶器・青花

片で、同図10・11は口縁が内側へ僅かに屈曲して端部で窄まるものである。釉は端部でつやのない赤茶、それ以下は黒色に赤茶のうさぎの毛模様を呈する。胎土は10が黒の斑点を含む灰白色、11は黄味の灰白色を呈している。10は第2層、11は第1層の出土である。同図12も口縁形態は前述の2点に類似するが、釉は全体につやのない赤茶色、胎土は黄褐色を呈する。第3層10～20㎝の出土である。同図13は口縁が僅かに肥厚するものである。釉はつやのない赤褐色を呈するが、黒色の斑文もみられる。胎土は白濁色で、第3層10～20㎝の出土である。

同図14・15の2点は円盤状の高台を作る底部破片で、外底を浅く削る。2点とも外底は露胎であるが、内底には施釉する。14は底径約4㎝を測り、釉は黒色に赤茶色の緻筋、胎土は黒色斑点を含む灰白色を呈する。第1層の出土である。15も底径約4㎝を測るが、釉は黒色を呈する。胎土は前者14とほぼ同じで、第3層10～20㎝の出土である。

**b．褐釉陶器**

褐釉陶器は総数101点検出された。その内訳は口縁部5点、胴部96点であるが、全て小破片のため、第18図1の1点（壷形）を除いて器種は不明である。以下、出土したものの中で、図示に耐えうるもの2点を略述する。

第18図1は小形の壷が推察されるもので、肩は張り、頸部で上位に折れ曲って断面「く」の字状の口縁部を作る。釉は黒褐色で内外面に施釉するものの、端部で掻き取りいわゆる口禿になっている。また、外面には頸部より肩部にかけて砂が薄く付着しているため釉は見えない。胎土は淡い灰白色で、第1層の出土である。

同図2は口唇部が円味を呈し、内傾するものである。釉色は黒褐色で、内外面に施釉する。胎土は黄褐色で、第1層の出土である。

尚、胴部破片の中には甕形の胴部破片的な資料も認められた。

## 12. 青　　花（染付）

総数58点が得られた。その内訳は口縁部11点、胴部38点、底部10点で、うち13点を第18図3～15に図示した。

同図3・4は碗形が推察されるもので、3は端部で屈曲して外反する。文様は外面に動物（馬？）と2条の界線、内面には界線のみがみられる。尚、呉須には濃淡をつけている。第1層の出土である。4は口縁外面に波涛文状の文様、内面に界線が認められるものである。呉須は淡い藍色で、釉には貫入が見られる。第1層より出土した。

同図5・6は外面に牡丹唐草文、

**第23表　青花（染付）出土状況**

| 層位＼部位 | 口縁部 | 胴　部 | 底　部 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 第　1　層 | 7 | 20 | 7 | 34 |
| 2 | 1 | 9 | | 10 |
| 3　0－10 | 1 | 4 | 3 | 8 |
| 10－20 | 2 | 4 | | 6 |
| 20－30 | | | | |
| 計 | 11 | 38 | 10 | 58 |

内底には玉取獅子や羯磨文を描く皿の口縁部破片と思われるもので、唐草文と界線がみられる。2点とも第1層の出土である。

同図7も皿の器形が推察されるもので、口径は約11㎝を測る。呉須は藍色に発色しているが、外面では部分的に褐色を呈する。内面には薄い界線がみられるものの、界線と釉の境いは不鮮明である。また、釉は呉須の色がしみこんだような淡い青白色を呈する。第2層の出土である。

同図8は口縁破片で、2条の界線下に如意頭状の縦文様が認められるものである。第1層より出土した。

同図9・10は雷文が配されるものである。9は口縁部の破片で、内外面に雷文が認められる。第3層10〜20㎝の出土である。10は胴部破片で、中心で逆回する雷文繋ぎ文が内面に認められる。外面には草花状の文様がみられるが、判然としない。第1層の出土である。

同図11も胴部の破片で、外面に渦文状の文様がみられる。呉須は淡い青白色を呈する。第1層の出土である。

同図12・13は碗の底部と考えられるもので、12は界線が内外面にそれぞれ1条みられる。その他に、外面体部には花文状の文様も認められる。釉は外面で骨付まで施釉するが、内面では内底に輪状の露胎部を残している。釉・呉須ともくすんでいる。底径は推算約5.6㎝、第3層の出土である。13は高台外面と体部下方に界線が配されているものである。釉は外面で外底まで施釉するが、内底には輪状の露胎を残している。釉は乳白色、呉須は淡くて薄い青白色を呈する。尚、前述した内底の輪状露胎部分には砂がほぼ全面に付着しているが、その砂は外側で釉の上方に、内側では釉の下方に潜り込んでいることから、外側より施釉して円状露胎を作り、次に円内に施釉したと考える。底径は推算約3.7㎝で、第1層の出土である。

同図16・17は碁笥底の皿が推察されるもので、外面の体部下方には芭蕉葉文と界線が見られる。16は内底に花鳥文が認められる。17も内底に文様が認められるが、小破片のため判然としない。しかし、前者16の花鳥文とは異なった大形の花弁がみられることから、あるいは捻花文かと考えている。前記16を加えた2点は第3層0〜10㎝の出土である。

註

1. 上江洲　均「沖縄の民具」考古民俗叢書<12>　慶友社　1973年3月20日初版
2. 水野清一・小林行雄編「図解考古学辞典」　東京創元社刊　1959年6月20日初版
3. 沖縄県教育委員会「熱田貝塚発掘ニュース」　1978年3月
4. 亀井明徳「14・15世紀の貿易陶磁ーとくに日本出土の中国陶磁ー」『貿易陶磁研究No.1』1981年8月30日

# 第Ⅴ章　結　　語

本遺跡は周知の遺跡であるが、本格的な発掘調査は不幸なことに今回の緊急発掘が始めてである。発掘区は大半が現代の撹乱で部分的に含包層が認められたため、トレンチ及び層序的発掘はあきらめ含包層の発掘に終始した。以下、出土遺物を中心に若干の考察を行ってまとめとする。

出土した遺物は、石鏃１点を除くとほとんどがグスク時代に属する資料である。その中で時代考察上、必要不欠な土器・陶磁器より略述する。土器は総て小破片のため、胎土・焼成等の諸特徴から３種に大別したが、Ⅱ類としたものに熱田貝塚（註１）で白磁玉縁口縁碗や滑石製石鍋と伴出した瘤付土器が見られた。Ⅲ類は陶質土器と総称されているもので、青磁碗様の高台を作る底部を含むが、時期は判然としない。少なくとも、熱田貝塚のようなグスク時代でも前半の遺跡というよりは青花を出土する遺跡や古島と云われている地区で接する機会が多い土器である。稲福遺跡（註２）でも同種の土器の出土が報告され、土器と沖縄製陶器の間を埋めるものとして捉えている。しかし、未だ系統づけた土器→陶質土器→沖縄製陶器の移行は抑えられてないことから詳細な検討が必要であろう。

陶磁器は成作年代と使用年代が必ずしも一致しないという点で、編年上の問題を抱えていたが、近年進められてきている青磁碗の編年（註３）、白磁の編年（註４）、青花の編年（註５）を参考にした時、本遺跡出土の青磁・白磁は13Ｃ後半から14Ｃ前半の鎬蓮弁文青磁碗・玉縁白磁碗・口禿白磁皿より15Ｃ後半から16Ｃの丸頭細線蓮弁文青磁碗・青花まで認められる。

グスク時代の遺跡というと石を積み上げ囲繞する、いわゆるグスクと総称される遺跡が多いが、本遺跡一帯は①住宅・学校区でだいぶ変貌している。②緊急発掘で調査区が限定されている。③発掘は大半が撹乱であるなどの理由から石積みは認められなかった。しかし、民俗学の聞取り調査でもグスグという総称や石積みがあったという成果は得られてないことから、あるいは石積みを伴わない村落遺跡かとも考える（文献には親富祖村として登場するが、1737年に廃村になっている）。

尚、本遺跡は第Ⅱ章で記述したようにこれまでの表採資料より沖縄新石器時代前Ⅳ期からグスク時代の複合遺跡と考えられているが、それを裏付るような前Ⅳ期（縄文後期）及び後期（弥生～奈良時代）相当の資料は得られなかったものの、前Ⅴ期（縄文晩期）相当の遺物（石鏃）は１点出土した。

註

1. 沖縄県教育委員会「熱田貝塚発掘調査ニュース」　1978年３月
2. 琉球大学考古学研究会「稲福村落第一次調査報告書」　1971年９月１日
3. 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究№２』　1982年８月28日
4. 森田　勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究№２』　1982年８月28日
5. 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究№２』1982年８月28日

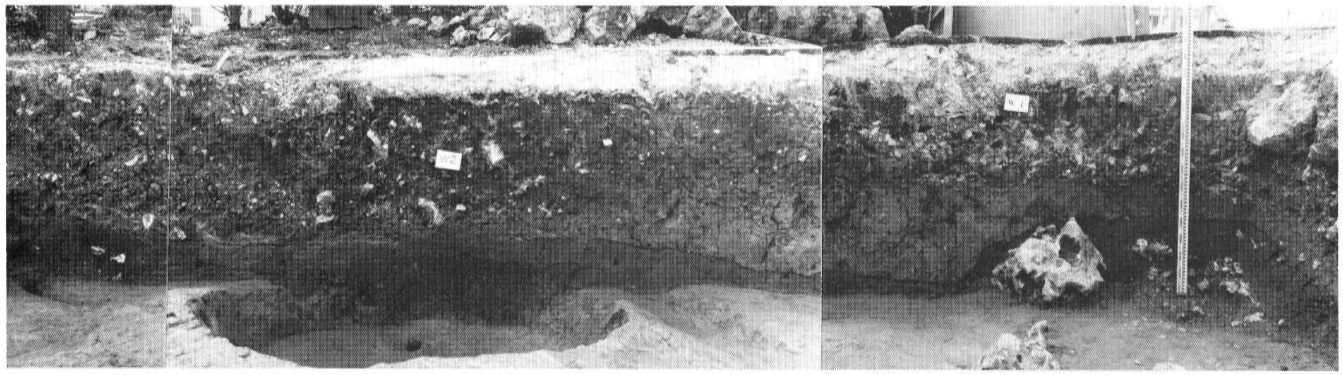
# 図　版

遺跡遠景（南側より）

**第1図版**　発掘状況

発　掘　状　況

**第 2 図版**　青磁皿出土状況

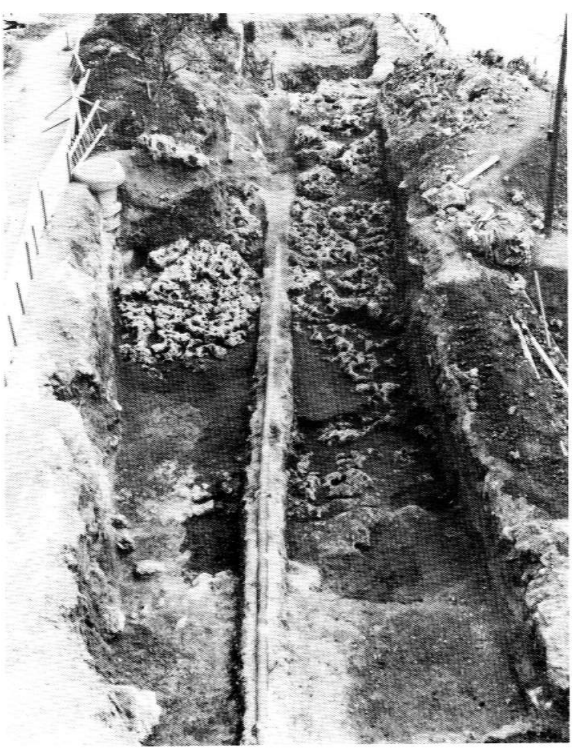


西壁

北壁

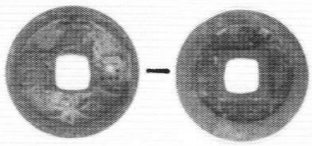
**第3図版**　第1発掘区壁面

第 1 発掘区

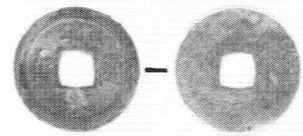


第 2 発掘区

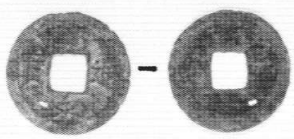
**第 4 図版**



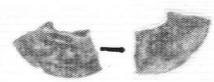
1



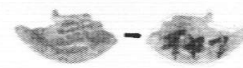
2



3



4

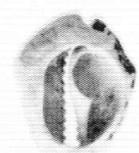


5

6

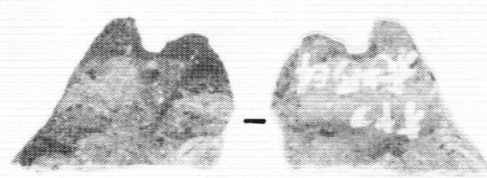
7

8

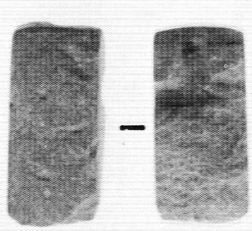


9

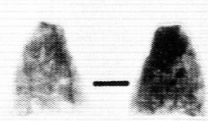
10



11

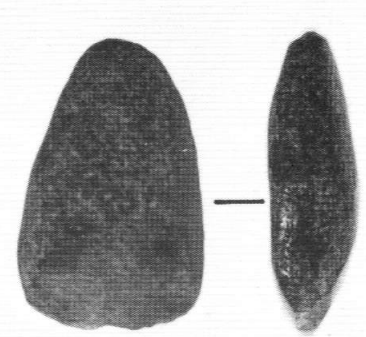


12

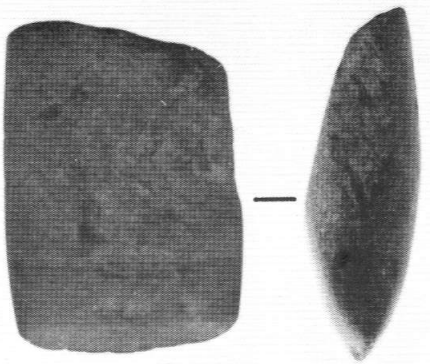


13

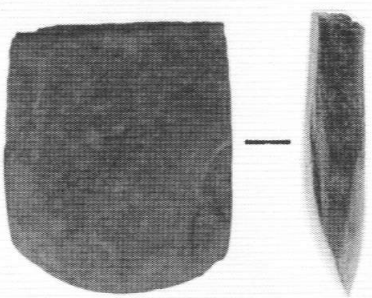
**第 5 図版**　古銭・貝製品・土製品・石製品・石鏃



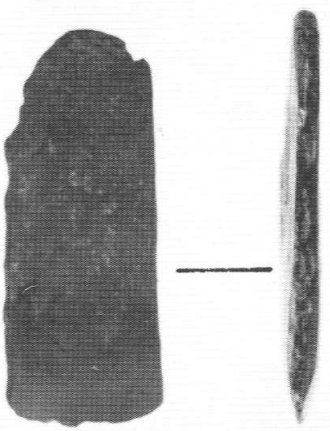
1



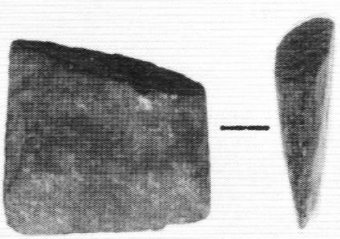
2



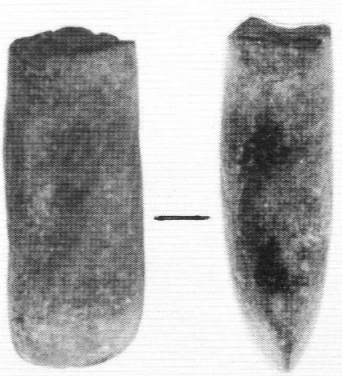
3



4

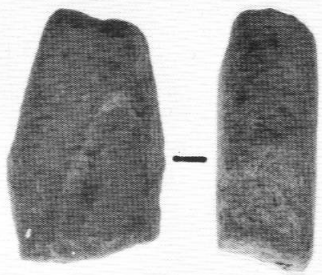


5

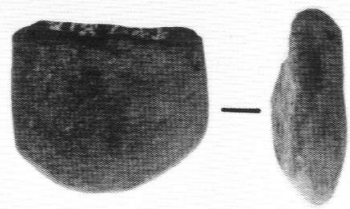


6

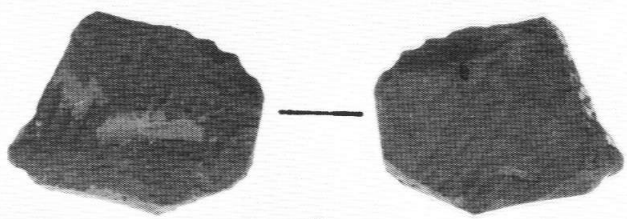
**第 6 図版　石　　器**



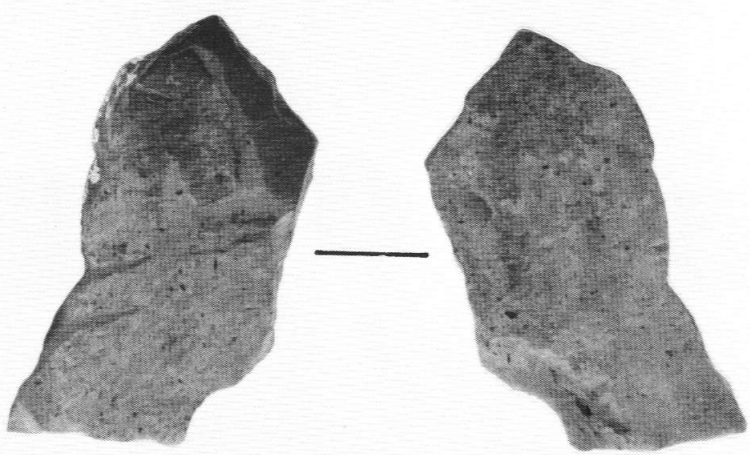
1



2



3

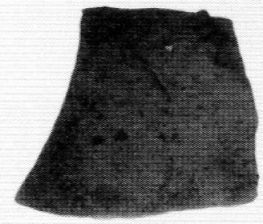


4

**第7図版**　石器・瓦質製品

1

2


33

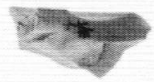
4

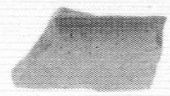
5

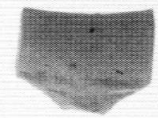
6

7

8

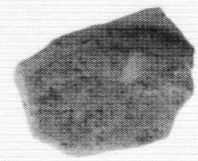

9

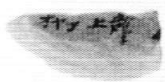

10


11

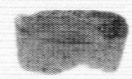
12

13

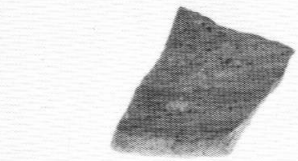

14


15

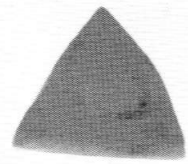
16


17

**第 8 図版　土　　器**



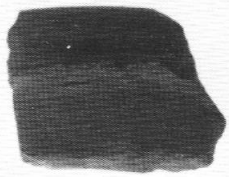
1



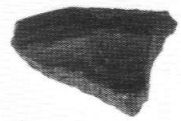
2

3

4



5



6

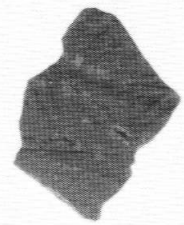
7

8

9

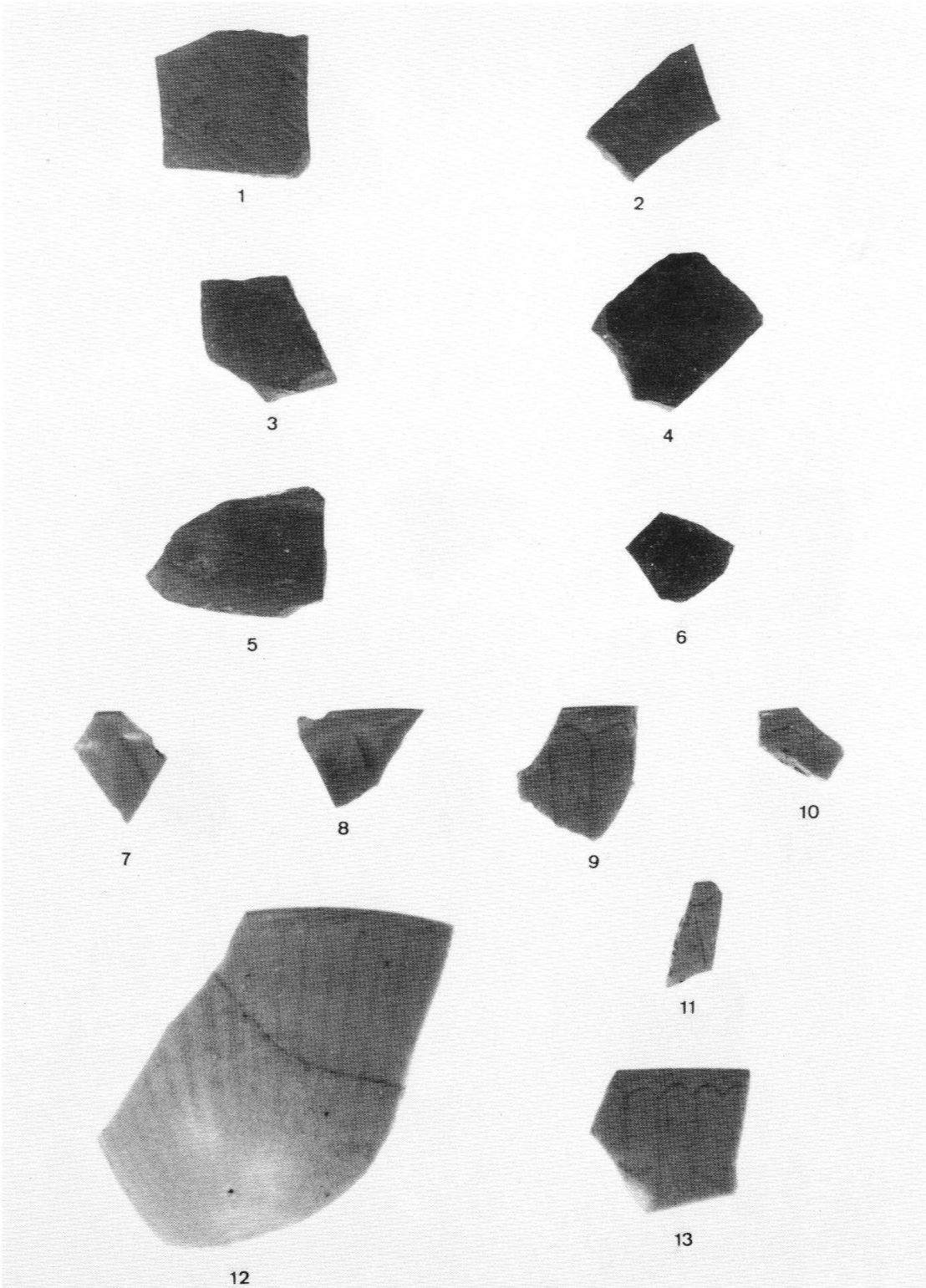
10

11

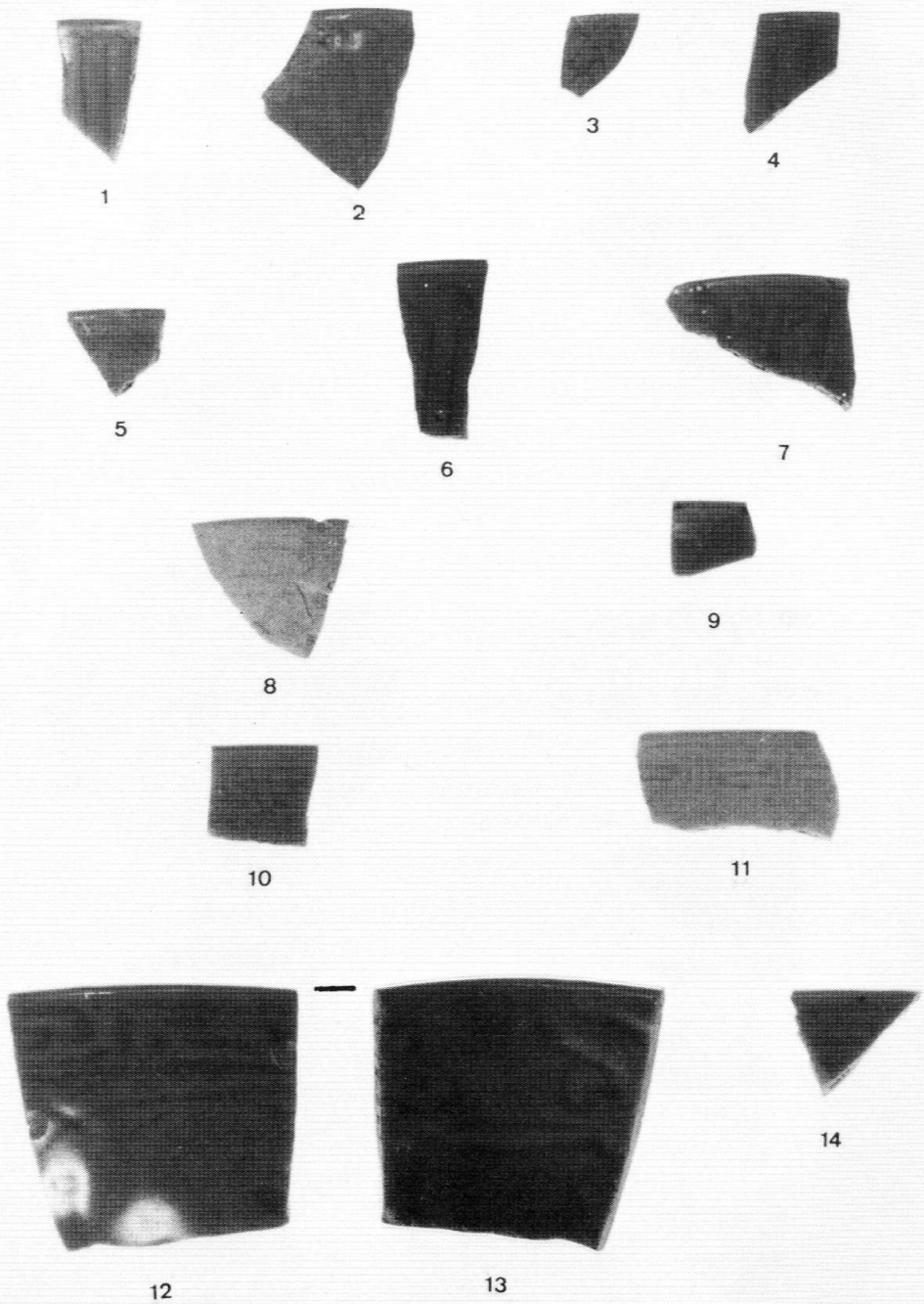


12

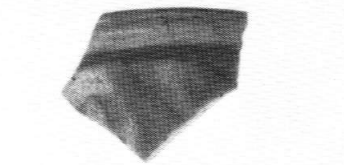
**第 9 図版**　土器・須恵器

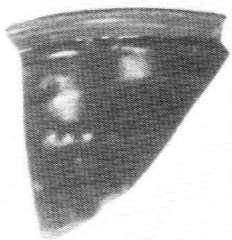


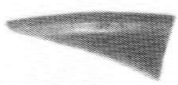

**第10図版**　須恵器・青磁

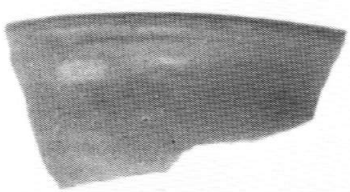


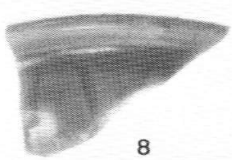

**第 11 図版　青　　磁**

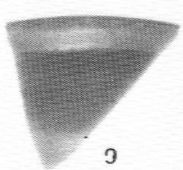

1


2


3


4


8

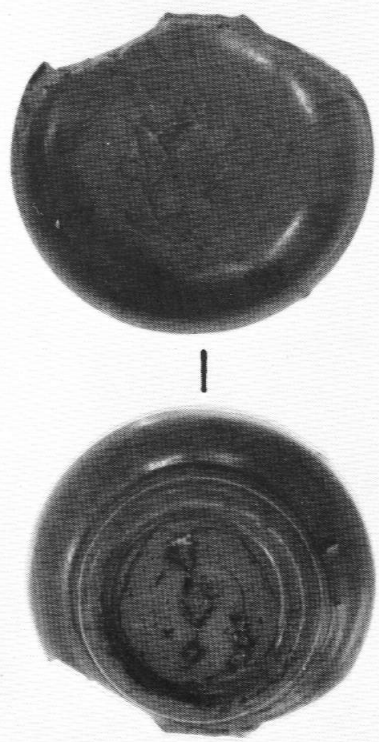

9

10

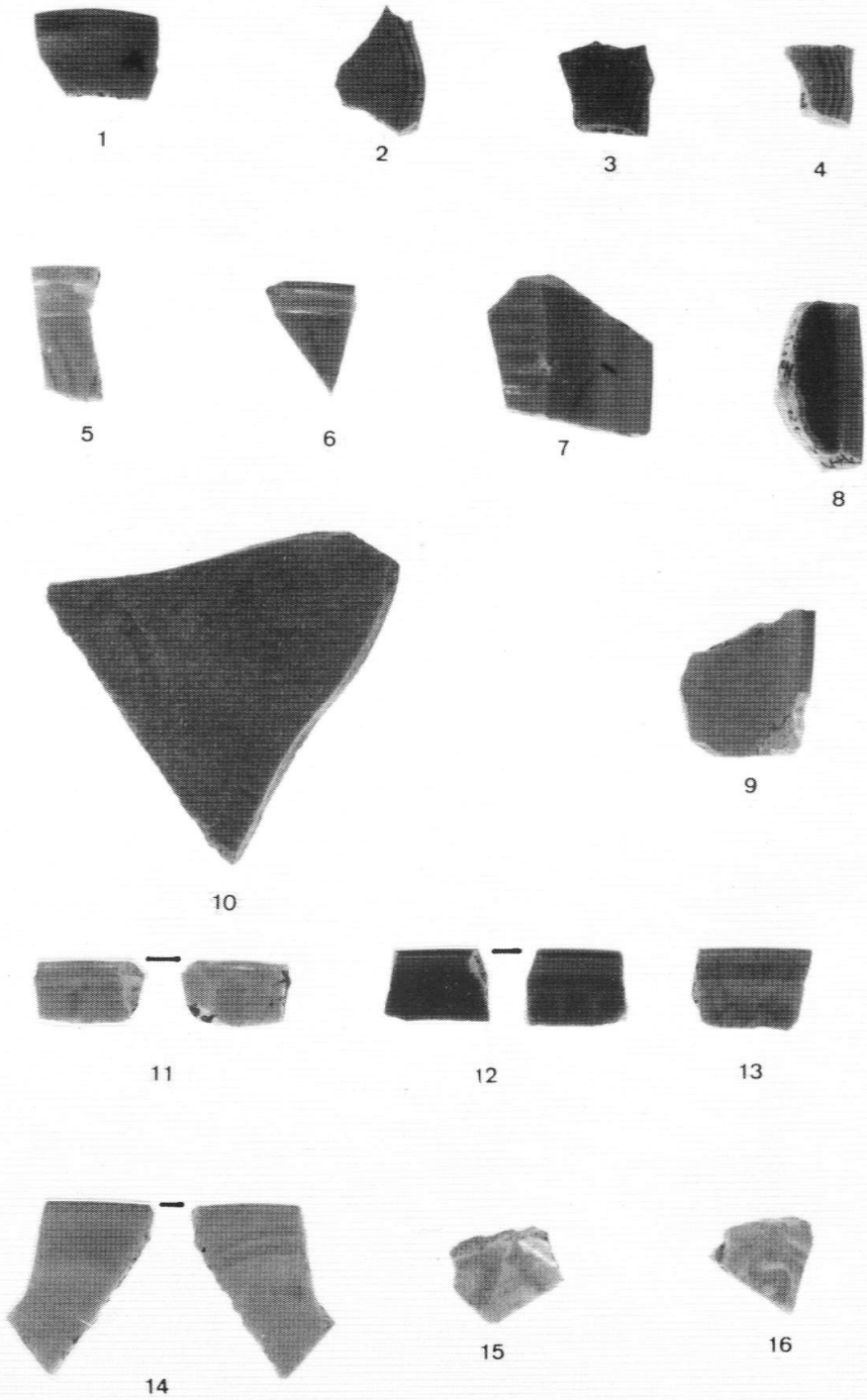
5

6

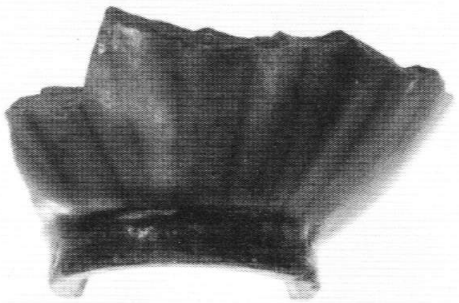
7


11

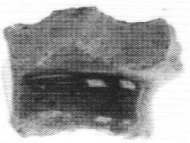
**第12図版　青　　磁**




**第 13 図版　青　　磁**

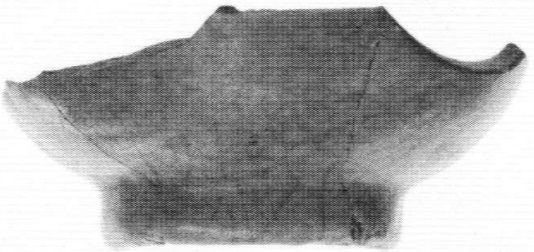


1

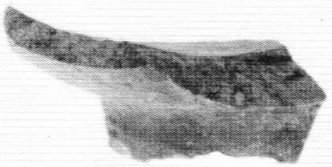


5

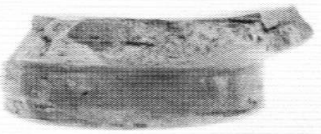
2



6

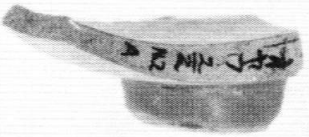


3



7

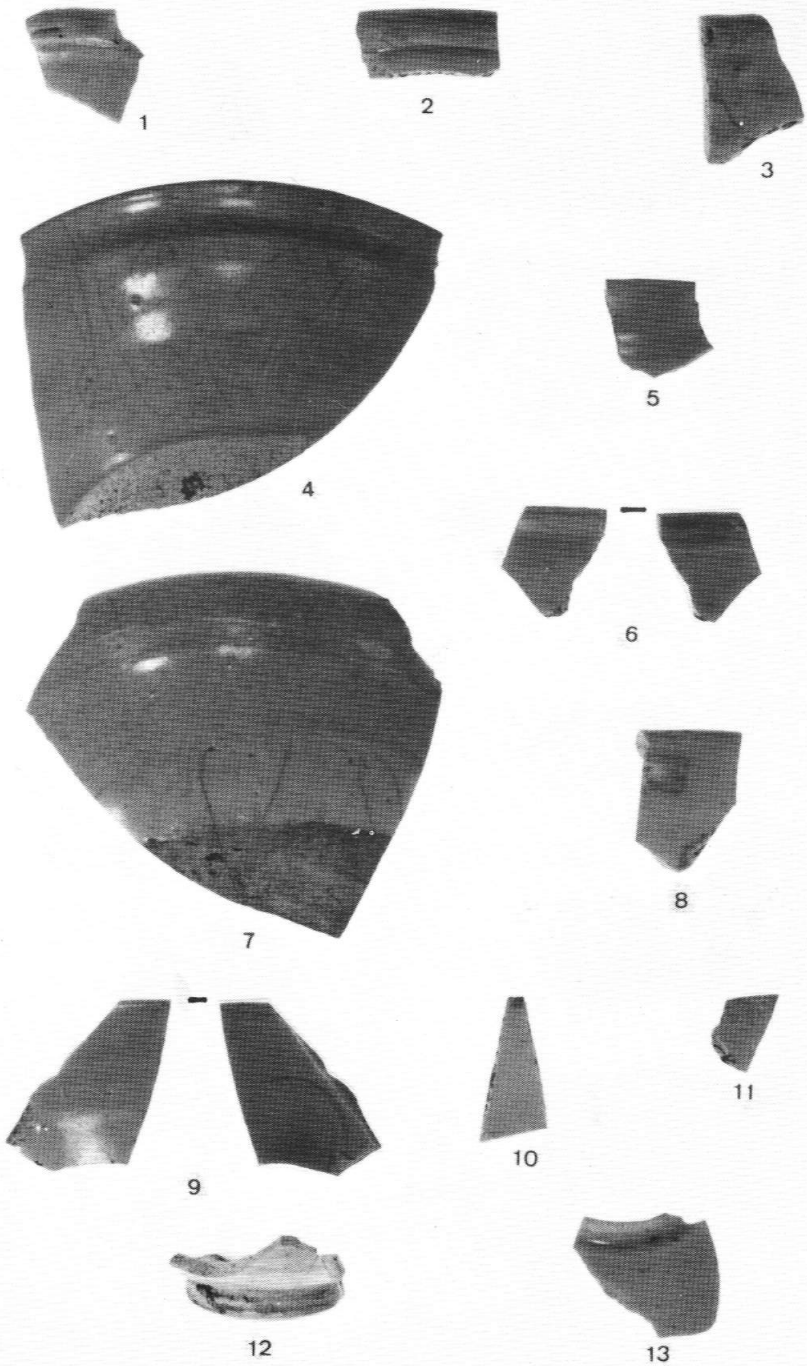
4



8

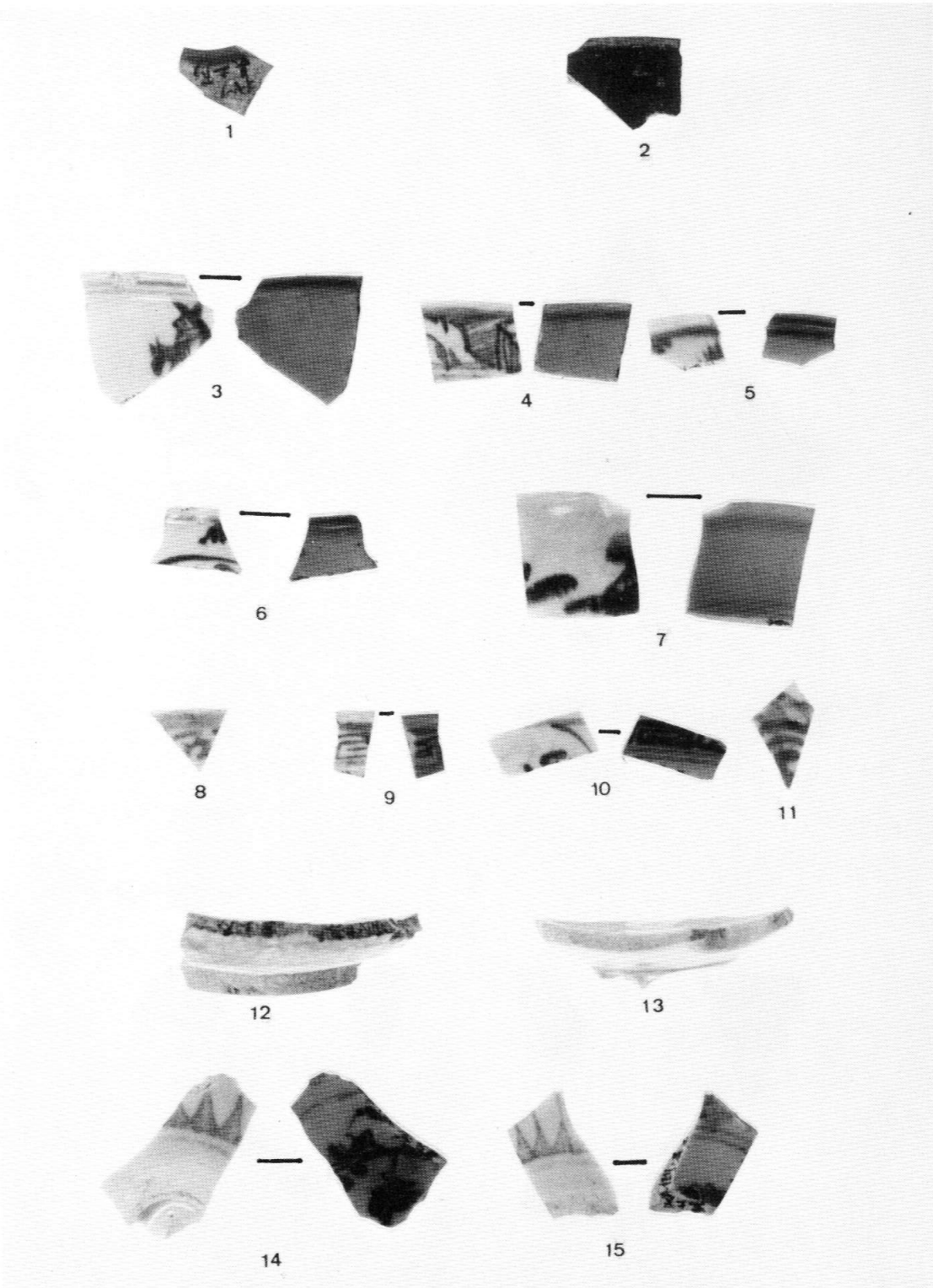
**第14図版**　青　　磁

**第15図版　青　　磁**




**第 16 図版　白　　磁**

**第17図版**　白磁・黒釉陶器




**第 18 図版**　褐釉陶器・青花

# 浦添市民憲章

わたくしたちは、
古い歴史と新しい希望にみちた、
てだこの都市・浦添の市民として、
この憲章を定め誇りをもって
その実践につとめます

1. わたくしたちは、
自然を愛し、みどり豊かなまちをつくります。

1. わたくしたちは、
きまりを守り、住みよいまちをつくります。

1. わたくしたちは、
働く喜びをもち、活気にみちたまちをつくります。

1. わたくしたちは、
平和を愛し、文化の香り高いまちをつくります。

1. わたくしたちは、
心と体をきたえ、明るく健康なまちをつくります。

浦添市文化財調査報告書第3集

親富祖遺跡

——市道12・24号線改良工事に伴う緊急発掘調査報告書——

©

編集　浦添市教育委員会
沖縄県浦添市字仲間1350番地
電話 0988－77－9404

発行日　1983年3月

印刷　文進印刷株式会社
那覇市上間567
電話 0988－55－2323（代）